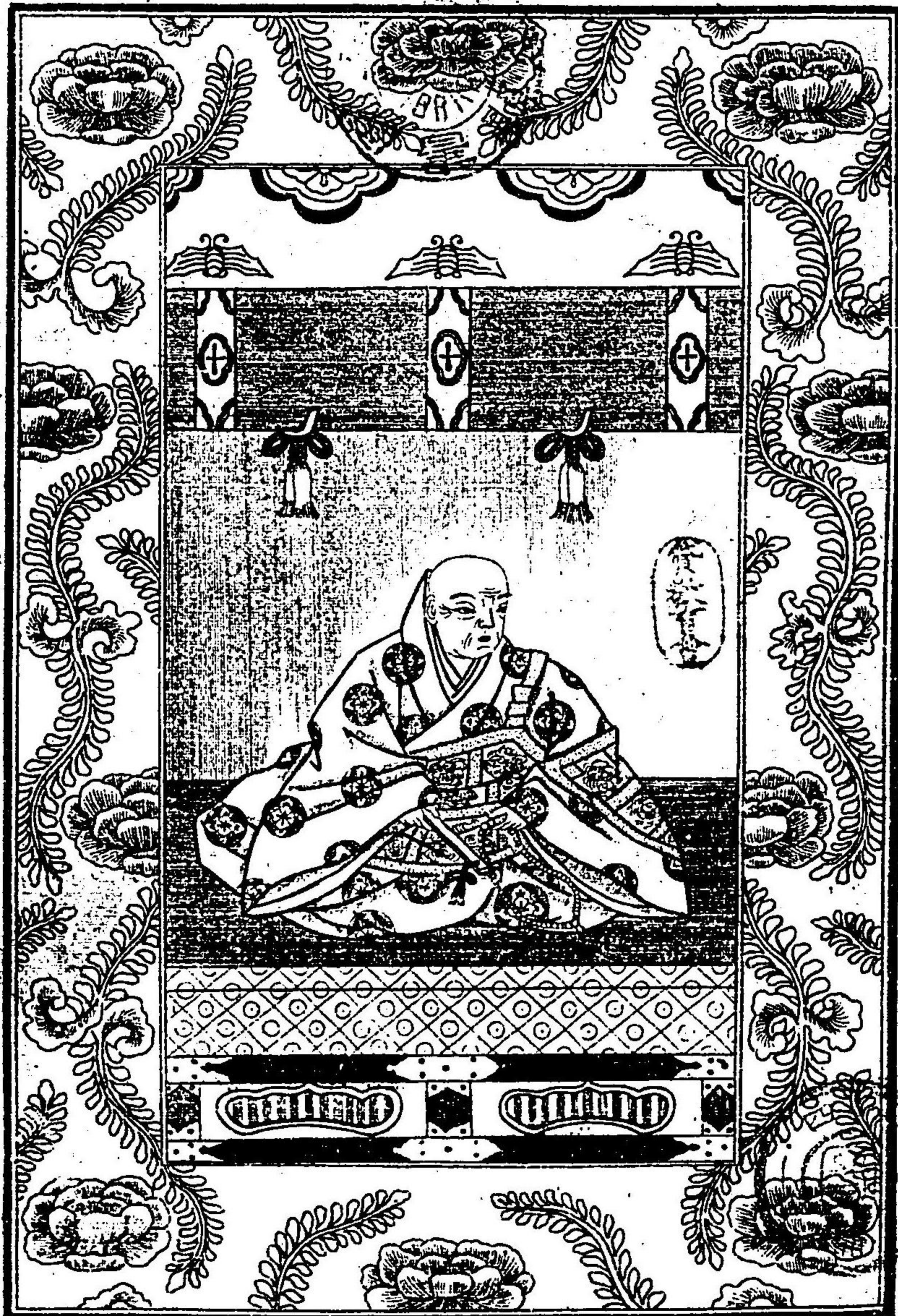
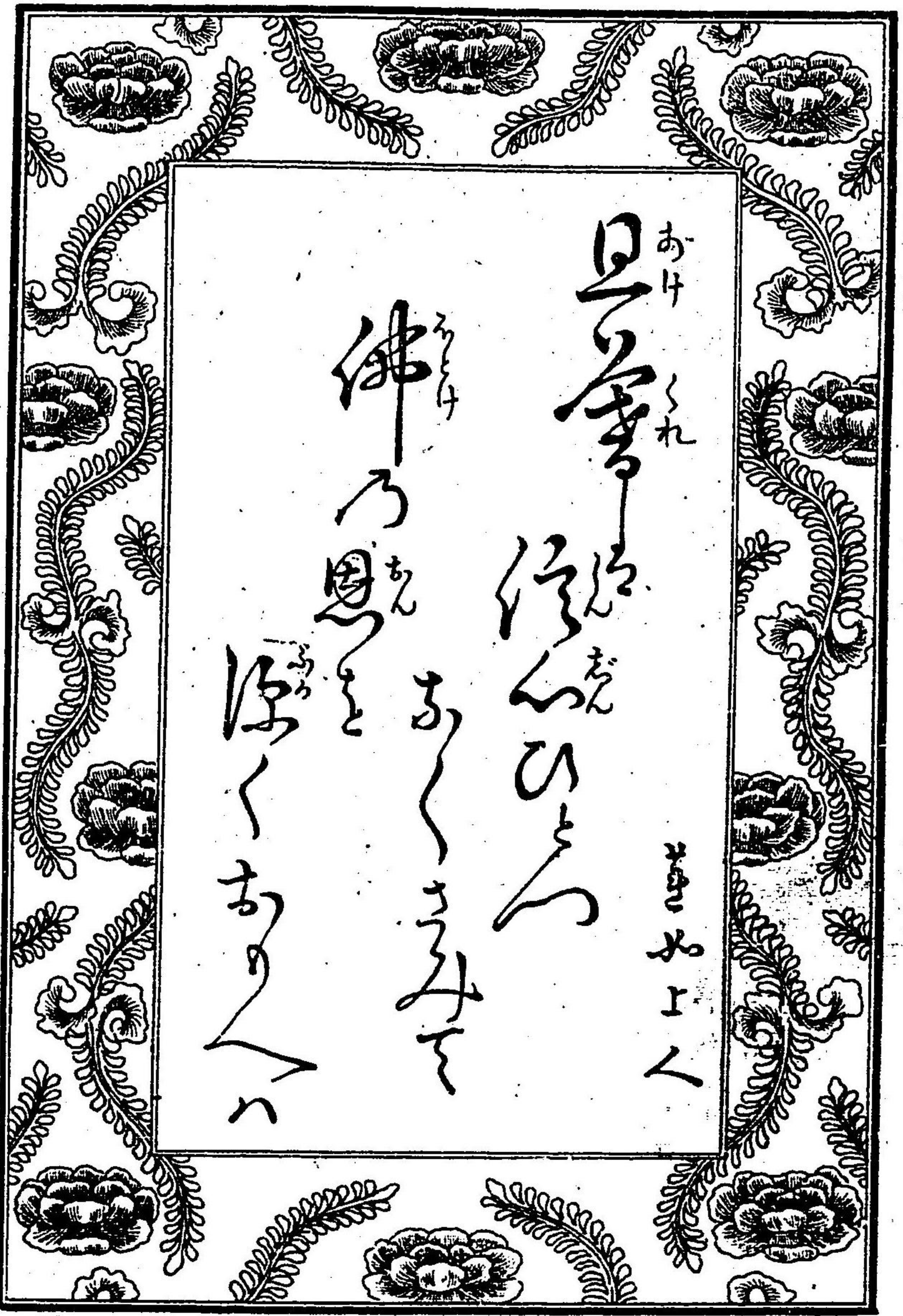


特36

905 No 9598





蓮如上人

日之幸
行心ひん

佛の思
あくまみ

深くあひ

蓮如上人御一代記圖繪目錄

御系譜

- ① 蓮如上人御出誕並石山寺觀世音奇瑞の事
- ② 大谷本願寺御繁昌並山門大衆蜂起の事
- ③ 三井寺南別所近松へ御移住並御真影御遷座の事
- ④ 越前吉崎御堂御建立並朝倉年景宝財寺進の事
- ⑤ 諸宗より偏執並息女見玉足御往生の事
- ⑥ 蓮如上人多屋衆へ御制誡並馬書朝倉家へ贈る事
- ⑦ 加刺富樫政親一揆を鎮らるる並川崎專称寺兵火の事
- ⑧ 蓮如上人十一ヶ條並專称寺再び建立の事
- ⑨ 哀傷御消息並慶順乘念の弟子卒去の事

- ⑩ 朝倉年景子息氏景吉崎へ参詣並三ヶ條の制狀披露の事
- ⑪ 蓮如上人敬景に對し法話並富樫政親蓮師と尊崇の事
- ⑫ 上人北海を眺て和歌詠吟並吉崎火災の事
- ⑬ 蓮如上人吉崎の御文章並吉崎退去の事
- ⑭ 河列出口御堂草創並龍女上人に謁すの事
- ⑮ 塚御堂御建立並契丹國の人教化を受るの事
- ⑯ 山科御堂御建立並近松小御越年和歌の事
- ⑰ 御影堂御造建並吉野山材木登るの事
- ⑱ 御真影御遷座並三井寺より御真影を遷るの事
- ⑲ 山科小寺七昼夜御法衣初て行る並三種の神器御誓の事
- ⑳ 山科阿弥陀堂御建立並寶祚延長を祈り奉るの事

- ㉑ てに教あを以て易行道と教ふ選子内親王和歌の事
- ㉒ 大阪御堂御草創並聖徳太子示現の事
- ㉓ 聖徳王未來記並本願縁起の文の事
- ㉔ 蓮如上人御不例並下間安藝勘氣赦免の事
- ㉕ 上人御病中あう山科へ移りよ並吉野櫻を献げけし御和歌の事
- ㉖ 御辞世御詠歌並御病床にて御物語の事
- ㉗ 御父御聽聞並御秘蔵名馬を御覽せらるゝの事
- ㉘ 蓮如上人御遷化並御臨終ふ遇も人々の事
- ㉙ 六字の名號奇瑞並祖師の尊像現し玉ふの事

目録 終

蓮如上人御系譜

○親鸞聖人 有範息小名十八公麻呂後別號号範實少約言公善信房又号愚亮弘長三年壬戌十月廿八日滅 御年九十歲

印信 寺門大威遁世 女号小黑女房

善鸞 慈信房宮内卿 二月轉白 如信上人 文曆元年誕大納言 六十二歲 正安三年正月四日逝

明信 号栗津信蓮房 道性 從五位下大夫出家 号益方大夫入道

女号高野禅屋 覺信屋 初日野左兩佐廣經室号跡女 文永九年本願寺草創

覺惠 父空兩佐廣經山門阿闍梨 中納言通世 覺如上人 真法印權大僧都 中納言宗昭 一葉院信昭 人僧心門信 直名光仙 觀應二年五月十九日逝 八十二歲

存覺 法中權大僧都 常樂堂祖 應安六年癸丑 二月廿八日逝 八十四歲

從覺 法中權大僧都 大納言 善如上人 法中權大僧都 權大僧都後光卿為子 永應元年二月廿九日逝 五十七歲 綽如上人 法中權大僧都 權大納言時光卿為子 明應四年四月廿四日逝 四十四歲

六 巧如上人 法中權大僧都 大納言資康卿為子 号證定周永車主十月廿五日逝 六十五歲

八 蓮如上人 法中權大僧都 順如 号光助中納言号顯成院院 唯修院方大臣時光公為子 母下總守平貞教女 十八日逝 六十二歲

女 光真室法名如慶 蓮糸 左衛門督号二位瑞泉寺 又号本泉寺 出家法名見玉 甚受庵

蓮綱 法中權大僧都号母寺 始花園院玄誓弟子 女 出家法名壽尊 蓮哲 法中權大僧都号三位 母同享光教房又光園房

九 實如上人 大納言法中權大僧都号教思院母藤中納言永總女 大永五年二月二日逝六十八歲 女 法名如興行寺室

女 号左京大夫慈照院殿去 法名妙宗唯林院右大臣為子 蓮淳 三位法中權大僧都号顯性寺法名光應寺

女 法名祐心伯中將資成室 法名了古 女 瑞泉寺 蓮欽室 賢心母 法名了如

女 法名了古 女 瑞泉寺 蓮欽室 賢心母 法名了如

女 法名了古 女 瑞泉寺 蓮欽室 賢心母 法名了如

女 法名了古 女 瑞泉寺 蓮欽室 賢心母 法名了如

女 法名了古 女 瑞泉寺 蓮欽室 賢心母 法名了如

女 法名了古 女 瑞泉寺 蓮欽室 賢心母 法名了如

蓮悟

法中推大僧部号本泉寺
又号慶光切

女

法名祐心中山中納言宣親卿室

女

願行寺勝惠室法名妙勝

女 超勝寺蓮超室法名蓮宗

蓮藝

教行寺号二位又号兼秀

女 勝林房勝惠室法名妙祐

實賢

慈成寺 權律師宰相号兼照

實悟

中将兼俊室法中為子

實順

西證寺兼性右門督

實孝

木善寺侍從法中推大僧部
号兼從

女

常樂 臺光惠室

實從

順興寺法中推大僧部号兼智切名九九云
蓮印八十一歳の時誕生故と名とす

蓮如上人御一代記圖繪

① 蓮師御誕生並石山寺觀音奇瑞の事

淨土真宗の開山親鸞聖人より第八代法中推大僧部中納言無壽上人蓮如信證院と号し山列愛宕郡洛東大谷本願寺に於て應永廿二年乙未二月廿五日出誕す。是す如名と布袋丸と名付る御父は法印權大僧部中納言存如上人母公は江州石山の觀音の化身とぞ言へり。布袋丸六歳の時と母公自ら壽祿布袋丸の法姿と一柄の表袴を畫せしむりこれに巧みき身ありはとて御老の内陣より入るるにふり方なるに成る人こそ驚き石山寺へ還りしに彼の壽祿内陣よかりむひとをふんまり。まの思ふは寺僧も此すを尋けるに一統は時夜のま本尊觀世音に洛東大谷よりあるはゆりもかんとてふこと答ふこれをや人つりて疑ひもあく觀世音の化現と尊崇しけり。永享三年亥のまま布袋丸十七歳より山門の長吏青蓮院御門跡の殿令まで判發得たり。其の別廣橋中納言宣光卿の猶子として名と兼壽上人蓮如と改めむ其比は萬るに不便にて阿弥陀堂

三間四面御影堂の五門四面より遠國邊鄙より
 の諸人も少なきに御賜も負付りて白小袖の
 裏に紙に潮袖にちりり須をうけさせら
 せしとぞ時々南都の大乗院御門跡と師
 弟の契あきい御末智りて法相宗の
 奥義を授けり時天台山に登りて止
 觀の深理を究めそれより諸法よここ
 りて九て三十餘年の堂聖を積りて室
 徳元年蓮師三十五歳の時祖師聖人の御
 舊跡を巡拜せさせとて初て北陸に下向
 むい越前如賀越中の間所々に淨土ま
 く貴賤道俗を化導し王ひけき次第よ
 御門業も繁茂し御歡悦りて夫より越後よ



うつり信濃の善光寺に詣りての関東の國こ
 こりかへ巡遊しりるひ再び美浴するひ
 たり然るに父存如上人長祿元年六月十八
 日享年六十二歳して入寂しむ則ちは相承の
 後蓮如上人よりと至とわす継母如円の計ひにて
 蓮如上人の御舎弟日光院應玄とて青蓮院尊應権僧
 都准右の御門侶たりしを御家督の体にて姑りて御中陰も満し処小前住
 上人の御遺状を弄き足るに御相承に蓮師にお凌座しと直學すまきせりてふこれま
 よろしく披露りて御家督相承とて定めあひる此時蓮如上人は年四十三歳
 とせ聞へしに近江國今津の道西とて信心堅固の禪つりて存小大谷口より
 皆し御勸化を聽聞し又金を志し御奔駕を預い他より常隨服進し其迄の
 同行をも卒て御門業も次第にまき成りたり夫より御化導一朝に溢し功德四海
 よ満て注流益敷業ありありは禁庭より日革門を領りて大谷に移りて



たり因 比叡山の衆徒にまき妬憤りて上人の弘法を障尋し大谷の御堂を破却せんとせし囉哩なり

② 大谷本願寺御繁榮並山門の大衆蜂起の事

大谷本願寺累代恙なく相續りしが蓮如上人の御代に至りて御法流まなく繁昌あり殊に禁庭の御尊政も厚く諸國の赤流浦々の門徒おも湯作日々盛んありしかば諸山是を妬憤で寔も怨敵の如く其中より別して山門の大衆蜂起して寛正六年正月八日叡山西塔の慶純一山を觸廻し其の事を好衆侶貪欲の惡僧三塔より弛聚り同九日の夜勢揃して不意を討ぎて十日の曉天大勢大谷へそ押寄り本願寺には思ひも寄ぬるおれし衆僧大に因章し上人に葛布の十徳を召し僧侶一什室御筆物を抱て上人の法供し定法寺おで逃させむよ、ま佐木如光とのあ武士より元二の信者ありしが其日も亦諸



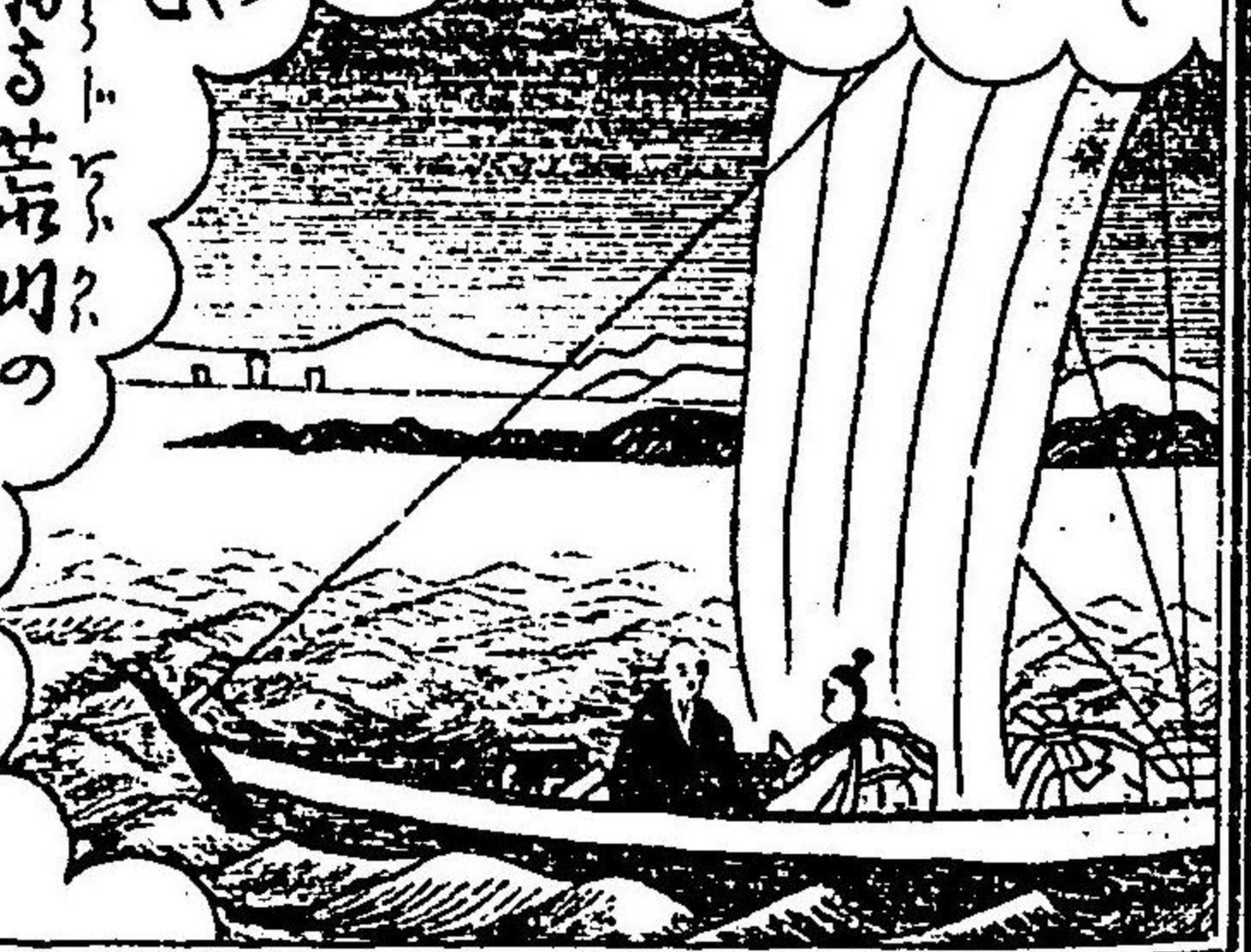
せしやまよかまふ不慮の逆乱出来しかば如光門外へ走り出ては者おれは根籍を傷むと力をふる立男威を显しげまお手の中より一人逃し出て中けるいふおくも王城鬼つのお護山門の衆徒に汝等其法を汲ずして秘まき修念仏の秘法を企て諸人を惑亂せしむ。条係は我山の外道へ早く降参して天台宗とあつた蓮如房をまてめ汝等まで金を助くるを左もあふん今焼付せんとぞ言ひける如光は甚し言をせず安らふに思ひればお物もくめりて多勢の中を四方八面に切て向う火花をちりして戦ひける下回安藝法眼もかあさるゝと弛白り歎救多討死て御真影を履まるとせ上人の法を慕ふ



其頃天下隆擾ありて堅田の逸もらうがかりなき文明元年の夏江が大海
 濱名太郎左衛門といふもの堅田へ帰定はまあり二月二日の夜まゝおきて大海へ着
 岸あさしめ濱名中上名の三井寺と殿山といむりより不和まき三井寺と船
 巧つて黙るべいと中上も運所すむひて生方能ま計ひらへど作りまは太郎左衛門二
 井寺へ来り得と名経ひ預て下回法眼を以て事の始末を具し作させられはれりま
 三井の長吏四満院御門跡は許容りつて三谷へおつ三井の南別所近松方
 ち領とせまふ余らせらきける上人斜あはれ悦喜あされ御真影を院内御速
 座りたり息運淳房三位法中権太僧都と附置文明三年辛卯五月中旬上人
 三井寺の大家に對面りりて堂内に北園内加賀越前の兩國に門徒も多く又ハ
 逸部のもまき山門の憤りもろへうははきよつてかの地へ下向
 政大さかす作ちまは大使領堂へはたは存然ふに親書聖人
 の尊像は性まはりお後政すべいと心易れといふものりり
 返答られは上人大に歡ひるは真影に向ひ此度北園へ下向



のりは法流を天下に弘通せよも天さがる都の巨入道中て
 化益致さんか光く壽存へり再ひる體をわくまはる
 べし先か今生の時略をて双眼ふははははうからさせ
 るか返小寺門に返松をまはらうひ安法法眼を以て供
 みて大海の浦よりおぬめりまは海津の浦へ着るひ木芽
 峠の險き山を越へ今庄は越前府中の宿場尾津浅
 水あるとるひ五月下旬お越考を相尋小庄小なるもかけ
 ちありて姑乃俗男女を以て化をすけりけは藤島の高勝の菅川の
 真りち和田の真宗方を始として日と夜と兼詰の僧俗相麻の如く前代末堂のものと
 もて愛中川尻の竹光坊とて博修の修りたり原弘心宗禪宗のあつて高慢徇執の族
 あまき蓮河の教法を受又无智の者勿心も発心懺悔して易りの門子入るとやめてつうあ法
 を勤て群集せしむるも我も一夜睡まはるは此を仇さん若邪義非はあはかの
 上人を返致さんと密り小刀短とまなうて一日北の倉へま揃り蓮河の時勅化を



徳安と九夫直入の要路の跡陀の本館を過ぎてなり出離生死の肝文を一聴
 千悟して立ぬる登道懺悔の年未修學する仏心字を汲め新上人の法
 子とく一向の修の法流を尊信せらるる。張石のめく夫の性光坊の常隨
 てり時上人を偈いす。三心の養を供りけるかのはお授てもは教化の遠
 の民俗大に敬伏す。まゝる本家の風み路の法と

④ 吉崎御堂御建立並朝倉敏景宝財寄進の事

蓮如上人思惟し、もろ加越の西國の衆生の機縁熟味せしから天晴此地に一字を造
 建とて法水を潤さんと思ひ、まきま越前に於て所々巡行し、もろ坂小坂細子本の
 御内吉水とよ所の風景務れていとあつらき各地ありまろ山麓おろし煙草
 を眺め、まろ方も戦水漫々とて波浪を巻く一方、岡山階々として
 幾千里の隈あり、北海あり、ひらあつて自ら浄土の福徳法
 邦を表し西り、詠せし、益城の松の風み、こころの月を清
 照輔の詩古今あり、まろ越の白山を、まろか、まろのまろ



世を觀し、ちの麻豆山の夕鳥の元常を告げ、まろ
 歌辭穢上の想を發し、清の波瀾をま
 洗々音に苦空无我の響とちやまれ
 四面の海も、下は是を踏み、自然に
 天上の心地せし、まろ誠子三徑の清風
 陶令が宅九江の明月、使公が城と詔
 廬山もあまき、まろ岩まろの勝地、此地に
 御堂を建立し、つて北國の群衆を化益し、まろ
 て此地の地類もまろ、まろ朝倉左衛門尉敏景
 とて申する、抑此敏景、景り天皇の苗裔ありて家族繁
 榮して、當國一粟谷お初て城郭を構へて朝倉義宗も、五代北國を道で威を
 擢せり、文明三年五月廿二日朝倉左衛門尉敏景お初めて一圓の御朱印、足利將軍家
 より賜る、又蓮如上人尚、國下向し、まろも同月あり、上人、國中にては化存り、か



因氏(いんぢ)あびく草の如く法義(ほうぎ)が入(い)り日々(ひじつ)に益(えき)が積(た)まりぬ中(なか)に諸(しよ)將(しやう)少(すく)して
 敏景(みんけい)の家族(かぞ)も累年(らいねん)の合戦(がっせん)で運(うん)を失(うしな)つて軍旅(ぐんりょ)の疲(つか)れ晴(は)さんとして我(われ)もくともま
 り親(おや)を再(また)いこみ世(よ)にりるも尊(そん)を敬(まが)ふと振(ふる)りぬる靈場(れいじやう)に敏景(みんけい)の由(よし)
 とすもひ斯(か)の如(ごと)く明(あ)め高田(たかた)の山(やま)下(した)向(む)のり松(まつ)のりあり信(のぶ)守(まも)り本願寺(ほんがんじ)天竺(てんぢく)鬼屋(おにや)
 根(ね)の苗裔(ひょうがい)あつて花浴(はなよく)に於(お)いて累代(らいだい)お後(ご)に跡(あと)を更(さら)に勤(こ)め早(はや)く仏閣(ぶつかく)を建(た)立(た)す
 て當國(とうこく)止(と)めまふべし是(こゝ)朝(あ)倉(くら)累代(らいだい)お後(ご)の吉野(よしの)あり幸(さい)吉野(よしの)の池(いけ)にゆり
 かの心(こころ)の地(ぢ)を承(うけ)り守(まも)り合(あ)へし敏(みん)系(けい)上人(じやうにん)を尊(そん)敬(まが)せりてむり頭達(かぶだち)長者(ぢやうぢや)
 親尊(おやそん)を敬(まが)依(よ)りあふふ其(その)因(いん)文(ぶん)白(はく)三年(さんねん)七月(しちがつ)廿七日(にじふしちにち)初(はつ)て吉野(よしの)の寺(てら)を再(また)り
 あり金銀(きんぎん)米穀(まいこく)入(い)り夫(おとこ)村(むら)石(いし)子(こ)そこも敏(みん)系(けい)宗(そう)宗(そう)進(しん)もあつて不(ふ)日(にち)お御(ご)建(た)立(た)りて和田(わだし)
 本見(ほんけん)寺(てら)田(で)を真(ま)宗(そう)と挂(か)け此(こゝ)山(やま)多(た)屋(や)を構(かま)へ四十(よじゅう)餘(あま)箇(こ)の坊(ぼく)全(ぜん)進(しん)
 造(ぞう)立(た)せりか上(かみ)人(にん)斜(しや)あつては内(うち)教(きやう)傳(でん)りりり
 ○諸宗(しよそう)より偏執(へんしやく)のり其(その)息女(いきむすめ)見玉(みたま)尼(に)御(ご)往(やう)生(せい)のり
 文明(ぶんめい)四年(しよねん)正月(しづが)雪(ゆき)も深(ふか)かりつても年(とし)立(た)り入(い)る且(かつ)より道俗(どうじやく)男(おとこ)女(むすめ)柳(やなぎ)の苗(ひこ)を引(ひ)き如(ごと)く



く群(ぐん)詰(ぢめ)す是(こゝ)によつて諸(しよ)將(しやう)山(やま)より偏(へん)執(しやく)をあはれり多(た)し中(なか)にも平泉(へいせん)と豊原(ゆへん)
 ちの中(なか)徒(た)下(くだ)ける頃(ころ)日(ひ)上(あ)り方(かた)より念(ねん)仏(ぶつ)宗(そう)の僧(そう)多(た)りて當國(とうこく)と加賀(かが)の堺(さかい)吉野(よしの)に於(お)いて一
 字(じ)の坊(ぼく)全(ぜん)を建(た)立(た)し念(ねん)仏(ぶつ)の一方(いっぽう)より外(ぐわい)に出(い)で離(り)の要(よう)請(せう)りて和(わ)むる其(その)甚(こゝろ)
 隱(かく)せし(は)珠(たま)まも
 國(くに)越(こ)え子(こ)に於(お)いて
 て、結(むす)江(え)の
 燈(とう)城(じやう)さ
 △横越(よここ)の淨照(じやうしやう)寺(てら)清(きよ)水(みづ)頭(かぶ)の臺(たい)杉(まき)も原(はら)一(いつ)家(か)と
 と重(おも)も三(さん)門(もん)の寺(てら)とありあつてこれ三(さん)門(もん)徒(た)と
 名(な)づくる當國(とうこく)此(こゝ)三(さん)門(もん)徒(た)の宗(そう)派(はい)ありて加賀(かが)の
 高田(たかた)の宗(そう)徒(た)多(た)く其(その)本(ほん)願(がん)寺(じ)門(もん)徒(た)と稱(なづ)け
 て國中(くにうち)に漫(まん)るる奇(き)怪(がい)のり早く吉野(よしの)寺(てら)を破(やぶ)却(かへ)
 せんと内(うち)へ企(こ)つと重(おも)も國(くに)主(ぬし)朝(あ)倉(くら)左(ひだり)の尉(ゑい)敏(みん)系(けい)
 殿(との)涼(すず)く蓮(れん)池(いけ)を崇(たか)敬(まが)るるゆゑ其(その)威(い)を恐(おそ)れて
 左(ひだり)までのりぬるありりて加賀(かが)の國(くに)主(ぬし)富(とみ)樞(しゆ)改(かへ)親(せきん)と
 り高田(たかた)門(もん)徒(た)ありあつてこれ又(また)折(を)れぬる加越(かえつ)の
 兩國(りやうこく)強(ぢやう)ありぬるを恐(おそ)めて月(つき)日(にち)を還(かへ)りりり

此の吉崎のやうなまは上入宮の以詮諸國より此山へ系流の藤井を妬む
 のちの兩國のち後の國へつひ又平泉を初め諸國の情を懐むべしと
 下文明四年正月下旬より諸人吉崎へ集り宿する宿止すべしと一統を傳せはさ
 まけきば兩國の隆も姑く禿るべしと道俗男女は控りて
 中ける、弥陀如来の本願に未代无智のこもりを救ひるゝ要法とて承りて
 諸人の系流をとりもする、弥陀の悲願も背きぬや似たりとぞ面々
 きりけるこ、此蓮池の正息女持壽尼を見玉尼とて洛陽浄土院小
 りくらく御父の教法小皈入し二心よく信心堅固の尼公たりしか都に細川山
 名の軍中へ洛中もの、さりり見玉尼就考へる下向りて吉崎よ
 り還るなりは不慮に病床に臥ひひは八月十四日は往生の素懐とてげむ
 小御養の刻は異なる四方を薫り此をせよといひま音樂きこへて菩薩もこ
 小来運の如くまき人と思ひの思ひまありしはあま五十九日午時比乃
 夜吉崎の屋敷の夢に白骨の中より二本の青蓮花を手にし蓮花の中

より一寸斗ある金色の仏休光を放ちて出現しむは為の穴にお飛去るものとて
 お方十六日の早朝に多屋敷をのく喜樂を祈り其の夜を語りて見玉尼公の
 往生の教もあま養極樂も生きたりやとて嘆けける上入由を
 しめさきて城人の性も各よりとり即ち見玉の玉を
 見ると聖道門よりある真如法性の玉を修得の上に見
 るとつめあるべし今當流の行者極樂も往生せんや疑ひ
 あまき福相を法人に知しめりありの見玉尼一切道
 俗の大善知識をのく一念皈命の信心を決定して
 仏恩報謝の録名を憶ふべき抱こともぐは勸化
 有るまに聴衆もあま隨其の法を傳へるなふける
 四方あかきあうりし此上人の化存ありん在家
 止住の凡夫に極樂往生叶ひがたとい諸字より妬句
 るとも入座の二天のの後生を踏みすべきやうありてそれれ



と吉崎へ邪系く貴様老若巻満くけきハ上人もあつらう及ぼしてかく制らぬ
 本もあつらう其比容顔格く見へける女世男あんとおとあお奥くた人吉崎へ
 冬宿してける諸ふより門下名山へ群集するま代の不可思議さうれも罪業
 原き女人の才あまき此をぬきうけて往生を願ふと山中の人あなねりされか
 持法法口口に弥陀お皈命して助すると思ふ心の一を 時如來の光の中は持
 一も此上にお授ても覺ても立ても居ても南无阿弥陀佛と唱て仏恩を報ずま
 と懇ま請られか此女人も其其の人の口されなる誠又不思議の宿縁は信す
 せて諸佛の法をせまふせつるもの皆かこよ前すとて中へてりもあつて覺へ
 る今今や明くとしてほさうかめて返出けり人々怪しみねをん送るも先ッ一人ハ
 吉崎の向ひなる麻葛の社へ入りぬを其社を廻り信すと云う神託みき人ッ
 兄共ひぬ中もけたりき女は白山の麓よりつる夫いぬと云成は上人の化存神
 にも通下りるとて人々つろく溜作の思の跡始りり判

蓮池多屋衆へ御制戒并居書朝倉敏景へ賜る



文明五年三月下旬世上頻に發く吉崎山へ諸人群系
 せむる諸諸山の滅たふき速は軍勢を僱破打
 すべとの風間隠きあ上人も兵と互怒を思
 召れつるつらんと多分の面くと召集りき中議批判
 と聞るに本覺ちの蓮惠の今弟和田五郎左衛尉進
 出て申けるに今天下経擾の虚も衆して諸浪人の女賊
 堂塔へ乱慕く仏具を棄ひ宝財を掠とりつらひ山所は出
 張して往來を悩衣服を剥とる輩多し此吉崎へも乱入
 せんる心元は此濱坂浦の上手より吉崎浦春日山の方へ堀切
 と通し吉崎浦一方口は致し置い何方よりも攻る便あり
 越前朝倉敏系殿當山を尊崇しもるおまきよめ山を攻るす所は
 豊原の浪人者不日は敏系殿誅伐せらる由もまへにひか所詮如賀一方より考
 くる事あり然るに橋口は榊を梅へけ和田五郎を居屋車は土吉崎へ考本なる



るへうに又三回の本筋院を大将として潮越の方より攻まる風さつくと魚とも潮あを
 約つぎに乳巻ひひり上波段の照順松本新左衛門赤尾弥七郎池田太郎尤もつふど
 とつ一務苗千の兵士及び潮越の方心易し唯人夫を以て堀切のすべりと人主
 申ける多屋衆これ同心せしめ惣ぶ明日より要害を搦へ出城の至り大聖寺の
 前岐八と家と城よりますべいと伴儀せり因茲此趣を上人へ頼ひ中上へ連沙
 方召きて守るに各々中さるる所一つとして道理をけいする其故に去文明の初めより
 南平三ヶ年の間此山居住せしむる文字は花菜種よりは又名が利養の為ま
 もつるに只
 北陸の傍
 信安心の
 未決定の故或ひ邪義と執心し却て正道を信受せず
 空しく三途に随する不便のありこそもこれ何故か
 領解お違して門下の輩邪義を信して正我と思ひ南流
 眞実の法名をえて其門下く小化益せし末この門徒
 までも決定眞実の法を信す今度の一大事の往生を
 違ふに誠は自信教人信の釈義もおけけ且祖師聖



人へ報恩謝徳もあつたんと思ふおつて門下一人
 ことも信心決定ありれりと思ふる昼夜懈らざるを願ふ
 此地の冬あつたれい演道のつれし烈しく浦智の浪の音波松
 の細引の影のいふ年あゝの涼きふ道を失ひ空風ふ開きて
 まる年を四多も老病つり起りて茶ふつけても苦若いや
 まゝこころ老ふとさきども只加越の乃信南流の眞実
 信心をととありんと思ふ此山は三年の居住せしむる
 りのたといはる法山倚執の族出ありて此山を破却し永余を
 ともともあそふの所感あきなり及ばざるこ悲るふ橋は出城を搦へ人教を集
 るるに益のなす此山を攻めとるべきあふ我此山を退出して上洛すべき覚
 悟の内と究り申こと以言書を尽して信ふれはき多屋衆一々相聴して中上げ
 るに後の起さ心徳は徹し有難くなすなり信ふ志あり上人教へは登りあさ
 るべし山百餘家の老何方身と隠れべき所あり山野海濱より命をさ



由多き悪賊工身と亡はるふれば一ツハ我々が為りても作小又上人一彦以下
 向りて此山は山をといとふみむひ大陸の及俗大半は教化をうけは法海は基佐ふ
 を空しく他山の悪徒よとまき中へさる甚敬しく存まると幾回音中上げき上
 人首て各の中さる一々至極ふきども獨生獨死獨去獨来と徑にも説せむ妻子
 称實及王位勝余種時不隨者とも涼ふれて山野は身を棄るも驚くべき事小は諸
 穿人共財宝を棄此山破却及ふといへとも朝会教景とい諸年三會の晩生への契
 約まで本願方お侍の山あふ又り再び山を造立まべき事易るべし必ずしや害
 を構て防戦を企つす無え益ありと堅く制城し多屋衆相謝しては教訓の客一々
 兼知はり己来急度お懐中へ入りふかか一揆蜂起の事園主へお知らせ中へ教
 敵の存を思ひつるべき事には及と強中けき連阿も是服不及は飛丸と認め起勝も
 本堂方を使僧とて朝会教景へ作をさる其文に曰く
 慈と一札を以て送達せしめぬ三ヶ年の乃高山小居をト中根元ハ名聞
 利養の為あふは又ハ茶花榮耀をるとせは唯往生極楽の考計に然るよ

當國加越中の士民百姓皆徒は悪業を作り一善を修せは一功をも勅
 めば空しく三途に墮落すべきの者不便の事極りはしよまは幸ひ弥陀如
 志の本願末代の根拠お徳の法門なるよつと備へ念仏往生の安心を初
 るの外他多き近比穿人出張の我諸方より種々の難言言語回送
 惑の次身及子更は所願所望に於て皆て所望多きもの言行を以てそ罪咎は
 処すべきが不運の事悲嘆をわびりつるもの於於是心静ま
 念仏修りせしめんと致す其要害多き時一切麻鬼
 魁其便を得山海の軍賊障阜をあら故近日要害
 を構んと致す知あり其餘は所用多き時あり然り
 といども元押那の子細者出来せむ時今
 度順次の往生を遂仏法の考は一命を捨て合戦
 せよべき事一慈日多屋衆等合一回評定せしめ
 決捕は内なる承度と怒と謹言



文明五年三月日

朝倉陣心左衛尉殿

多屋衆

兩僧此書翰を拵まされし朝倉敵系對面つて遂に披見せし身中しりも
 返札を以て中へきりしは(ども)以僧來りき作上其義及びざるを以て上入
 寺外一山の多屋前へ中するべきに今度要害の多は断り非ぬなる魔魁或は盜賊
 の為要害を拵へるるに對しも及ぶざるを以て若卒人或は惡僧おど来て理不
 働の働いし寺破却不及び時此方より加勢を進すべく及吉清の方よりほりを出さ
 ねばするに比しく年用は及とて有僧の時拵を三合子十兩のを揚ぐる兩古を揚りて此
 由を中上りかば上人斜るに夜取つて多屋前を拵せしむるは修成されたるに及
 害をかまへざる全合戦の用意は四壁をかゝり門戸も修理を加へ切を穿
 ち又人夫の用意を備へけるのといひ方より勢を出し合戦の義停止と修成されたる
 七加刺富控改親一揆を謀る事并川崎寺称古兵火の事

文明五年八月上旬より吉清の山上に要害の沙汰ありしに加刺の浪人一揆中

多吉清の山はさしも要害の地なる所其上又激重に要害を拵ふるま何の
 世より破却せしむべきや遂日吉清敵目不及ぶる是偏國主
 朝倉宗敬せざる由もさし只恨むるに敵系又賀め
 國主富控改親敵に我者言派あるに若々及の軍
 討負作とも富控殿加勢のめべりま事初とて川
 崎專稱寺を破却せよとて二千餘騎八月十五日吉清寺
 乱ま入り半令一字も沙焼拂て軍神の門出ると勇
 進て吉清へ攻寄る所不後の方より三百騎斗りの勢
 来て疾せと大音勢にて呼せりける諸軍勢これを見
 て警破富控殿より加勢を賜りけると拵を叩て喜ひ
 けるに思の外関を上げて切かゝる一揆等大用障何
 りぞや心得がしとらるるに修成なる所加刺の大將山田太
 郎左衛門大音勢にて云るに富控殿の信も今度蓮如上人



越勢入下向ふ吉崎一守を嘗むい普く衆生を化益一ある願ふも欣
 おこるるに況や正理を順ずるの事か汝若吉崎は素請て日頃の邪義を改宗一安
 心の赴きをお侍をべき所は却て一揆を起し存外の偽ま言語同形のるに既に汝
 若も親亦鳥聖人の法流を汲あざり乎本窟の寺務職連如上人は敵對とて大逆無
 道のるに速に此陣を引去へし左もあくんが微塵もあまんと大に怒て云けま一揆
 とも案子お連あり一言の返答もあく物の子をもちすが如く比白ちりて逃去る
 とも川邊專稱寺に不意の放火あかり焼亡雜義の体あまら
 山田太郎左衛門と申けるに專稱寺の焼失は一揆せの
 所為之彼ら早速再興致すべしとて飯くれなる
 吉崎へ此由告へけま和田五郎進出で專稱寺
 焼亡せんつるこそ奇怪あれいで此方より逆奇よいて
 一揆の奴原采く誅戮せんともひりめきと下向法眼
 も是をすむこと同心けま上人海を渡りむ此吉崎の



滅亡安藝法眼と和田五郎とあり六國を滅す六國
 ありて泰平の頃と古人の語の如く此方より逆奇よ
 して戦ふに汝若七生まで勲あるそとあつらひげま
 けまいも人の對をふしてを止る上人これ山に居住せ
 むるよりかろ路もめれりゆる危を見て退よ如きこと
 本文りまに早く上洛せしめて安藝法眼が子息下向
 源五郎平井又左衛門大家左衛門松永慶順福田東を
 赤尾弥七郎を以て伴して麻呂超勝を退去しむひる。
 蓮師御制誠十二箇條を書き並川崎專稱寺再建の事
 今度如列一揆專稱寺を焼討せしる加賀の國主富樫政親大に憤りあひ一揆
 の張本安樂寺覺力を修けし味一の奴原より專稱寺のゆゑ任せ全再建遂
 さま一とありなまに血念に思ひあがるも國主の上意を以て是非及に一揆の
 面より金浪を聚めて專稱寺の講堂書院厨土城まで始より勝きて不日成



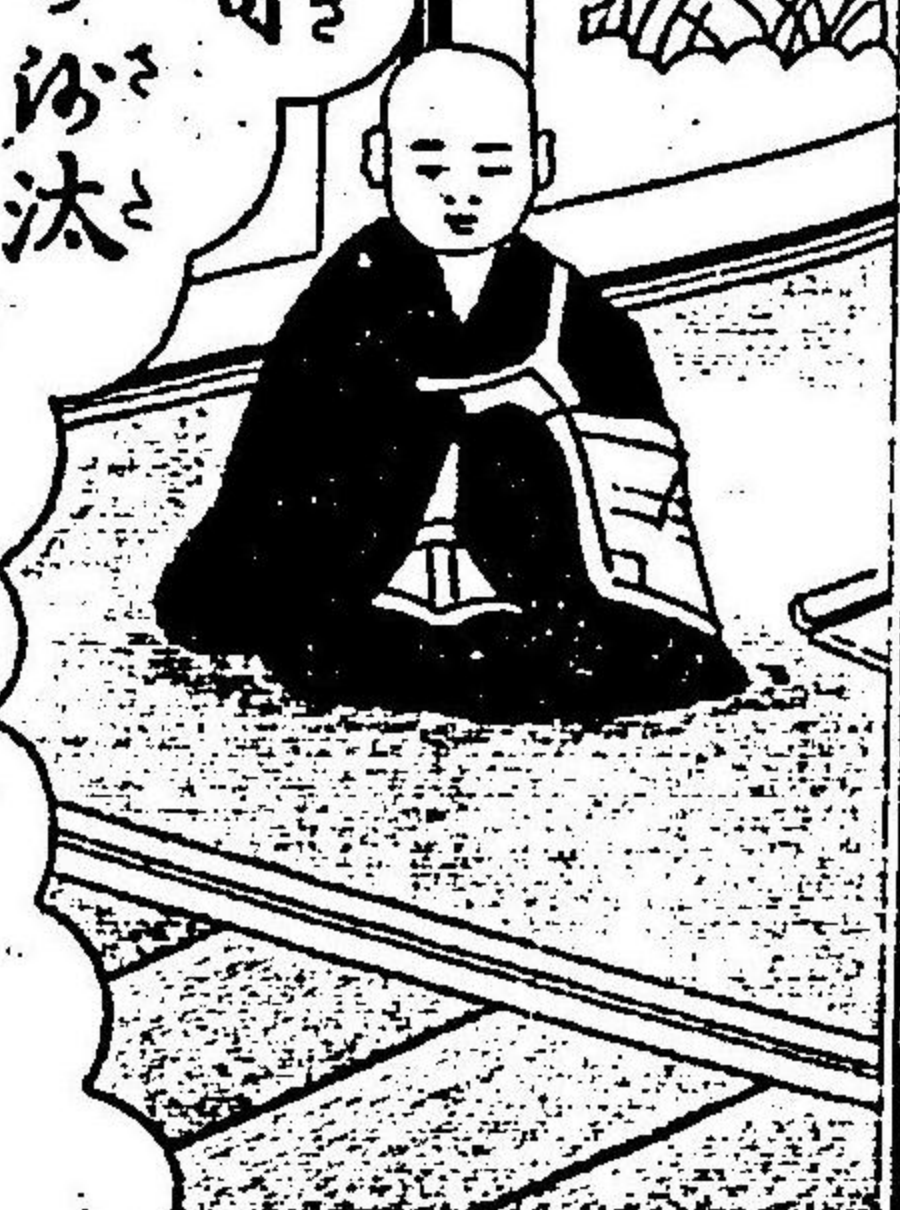
就せりける其時何者やん門前二首の和歌をぞ立らるる

川さねへ言田のほこみ入りて傍辺の懐田穂を出ひける

朝倉殿吉崎の多屋前をなまよせて作らるる加賀の二探前代末のりる
宿控殿理明白計の申亮より左めあり越前より退治せしむる存せり
あまの儀及いたる存のりる蓮如上人に藤吉へは退去りて
頼て後叙するべきのりる當國を早まるとあれはなまよ上人
を當山に遷住ありきるべき肯後法されしは即時ふなまよへ

まかりかくと口上りか上人は引あくる早く花浴へ候る
あはちうと近日登等かへき其用意をなまよる敏
まよきとまよひ上人の思召道理を極せしむる
か今度敏系に謀り思召し終へて合第
朝倉と三左衛門尉を使者として藤吉へ
せりて吉崎へ再び候住し我強て願ひるへん

上人も是非及むは時節も日を退めて寒気も
成り通ぬぬもいふも先高年の候住り
執事致すきしは返さされしける八月
十六日より九月十日まで名も返るる吉崎
へかへせむ夫々後世よむと勢もありてなるの沙汰
もあく目出度時節ありと國中の慌ひ限りあり上人修けるに干戈を視る時
國をんるを思ひふくしきとまよ秦せんるを思ふあふい不信心の者を見てに安
に決定させし思ひ多屋の面を見ても法に我も入まよかと思ふ斗りまり
今快く勸化し當山の衆中自今已後此旨を相守るべしとて十二條の制状
を認め示しるふ其文を曰く



- 一 諸神並佛菩薩を輕んずへうと
- 一 諸法諸宗を誹謗せり
- 一 我宗の振業を他宗に對し難なるらる

一物忌の佛法の方よりなきありといへば公方にて他宗に對してか
 くこそまをこぼれぬへきなり

一本宗に於て不相弟の名言を以て恣に法讚嘆はするべからざる

一念仏者に於て守護地頭を輕しむるべからざる

一无智の身を以て他宗に對し我意を任せて我宗の法義を毀りおし
 濫歎つとする者あるべからざる

一自身も安心決定せざして人の詞を以て法門濫歎せしむる者

一念佛會合の時魚を食すべからざる

一念佛集會の日酒の本性を失ふ酒飲むべからざる

一念佛者の衆中博奕かくし停止せざる

右此十二條制法の義北目は於ていかゞ衆中退出すべきものあり仍て
 制法狀如件

文明五年十一月

同年十一月祖師の御正忌會の時右の御制誠を以披露しりて自今已後此旨を堅
 くお守りべきより仰渡されし然るに此は正忌にハ雪もふりされど加越兩國
 の道俗衆諸群集して上人も喜悅の眉をひらかせり亦亦月は正忌の文章
 の真に

五十地よりある年までありしとてこのお月よりおぞうきりた 蓮も上人
 ことせすで今あるべきぞお月のはまらひゆるすこそまき 日

此ちのとく又お月よりある年より今もいふぬを承ありたり 日

○哀傷市消息並慶順棄念の二弟子率去の事

爰に松永道林寺の其後意慶順と申す上人別して
 憐れかりむひて跡は若輩あがも法義も堅固あるが
 文明五年十一月四日廿二歳にて病死せしき又福田寺
 の衆も无二の信心者あり一がまも同日は往生
 せしきけき老少不定のちりさも眼あまらうとて一山の



多屋衆に哀悔の消息をぞ賜りて

夫人間の為躰を弱に素ざるに老少不定と云あらずつまふまりのに我若ここと
きの凡夫ありこまよして身躰に芭蕉の葉に似し唯今も无常の風まらば
別やまきあんとしたまの人のざるまきたふらく厭ふべきに安養世界あり
ねふべきに安養世界このたび信心決定して仏法修行せすばいつの世より
うかむことまらんやこに過る秋のころ多を衆教のあたに松長の道林も
郷公慶順の年をいひ廿二歳ありが老少不定のいさまや遁れかたまふ
よりてつるに死すすまはまあるるあざり云はりもは(こまふ佛法は
心まひま一問の悟まなんもこまると思ふ如に今月四日に又福田の素念
も往生すかの道林も同日にいひ當て往生せしこと誠は信心の通うも一
味せしといれと思ひ侍のこそも素念の満六十也松永の慶順は廿二歳是
則若し老るるに先立いひまあまの道林もやまかまもこまも後先立人同
界の習ひいひまも造まかまも也去あが同一念仏无別道故の本文にま

六賢貝

此御消息を多屋衆へ披露す及び珠は一七日報恩誼のおに於て多を衆その外の人こ
すで秋暮信心決定せしめたる目出度本堂にまは返す去あが其修うち於
及へ信心もうせ果やなり細い信心の満まへて孫の法水を流せといへる
つりいを忘りあき信心お績やする肝要及家年来小園下向の本堂にま
就くつりといはれぬ

十 朝倉敏素子息氏家吉清へ奉信 并 三ヶ条の別状披露の事

蓮如上人者島まひりまするふ加賀の山中の温泉へ湯治つり
其切宥控殿の音信たまはる是に加一揆は煩
つりけるまより其此礼の考とぞまへけりは供の人
ま下間源五郎起勝古お相今年もまけま
聖文文明六年正月に重て三ヶ条の別状を示し其文の日



- 一 諸法諸宗を誹謗するがごとし
 - 一 諸神諸仏菩薩を淫しむるがごとし
 - 一 信心を執りて報土の往生を遂げざるがごとし
- 右此三ヶ条の旨を守りて泳ぐ心成りし時てはまきを以て木とせざる人にとけりて當山へ出入を停止せざる者あり仍て如件

文明六年甲午正月十一日

の時上人の言を去文明第三の番仲夏の時より真洛を出て四ヶ月廿七月下旬の既此當山の風波は在所より早急を以て此四年の寄居住せしむる根元別の子細は此三ヶ条の趣を以て北陸の國と南流の信心未決定の人を一味の安心はまさん等の由もまじい今日の時まで法事増悪せしむるや此趣を信用せし誠は年月を立回の本意をばき物と宣ひて此制戒の条に面も泳ぐ法は我に入まるこそ有難けき事也春もまはまあり



なまの歳のききまて長閑なる日ありてかまきり國のよりまはけ袖をつらね疎をつらね影しく其うへ加賀越前も國の守護深く尊敬しむるもまはけ國主の権もあはせけん又上人徳を慕ひん今ハ諸寺諸山の偏執もあはせ世間の雜説も止目出なかり一はありぬ



同年三月下旬朝念教系子息氏系十六山等ありて諸山を以て吉野の寺ありて福どり一夜に滞りありてまはけ一山の多屋悉く宿坊ありける叔敏系父子上人お對して終夜は相語り一上教景字にける此以承りたは去年正月の十一ヶ條の法制誠を以てまはけ加越兩國の法門下へ示しも止し粗る其一件は成ヶ條ありてやんお見せたりし上人答て皆宗法の發して曾て孫あるもあはんとも近年諸寺諸山より當山を如く申る全く他人の悪きありて自派の人悪きありて其輩を法んを為し善附くと宣ひて自等の制状を出させも教景頂戴りて一覽しも子息氏系お對し宣ひたるハ

慈して萬の司とある人の其者兼天然と備り此十々余の慈一とて跡あるもの
 汝も若冠とるとも此制状をよくく感見せめて身のちりせらるるべし我館
 取らば汝が若冠の制法を書て予らるる此の筆の相氏家へ送りては汝の由
 々まハ上人子細く進ませむらる

士蓮の教景不対法話三富極政親吉崎尊教の事

其時教景蓮の言も此条教の中物忌といふるは佛法の中これありと事
 公方或は他宗に對して相う忌やきるとは示し作何とて佛法の物忌と申すは法
 燈あくはや上人答て曰吉日良辰あんどやすむは佛法の中に決してまきるにて
 其子細とやむら大聖世尊は在世の時提婆達多阿闍世太子に惡逆を働めて
 終小御父頻婆沙羅王を殺害せり母提提希夫人を林獄せむ
 是より阿闍世太子の現立ふ五逆の惡報來りて身小
 惡瘡瘡隙あけ出で來まり萬の靈をを用ゆると人とも更に
 其は時居下者波女大臣阿耨世王を諫て曰く

太子の患も惡瘡の五逆罪の現報あまは世間の醫
 業を以て瘡を治すも所あり只三界の獨尊の釈迦年
 丘如來を佛顔とらるべし仏力にあはれてかゝる業病
 ハ平癒するもは阿闍世王宮の朕も達多ら
 すれあよつゝ如來への敵とありとまが假令精舎
 ありて瘡を治すも争う哀愍まはれんや老母の
 日佛は一切此世を憐れむる譬の親の子を思ふ如く病鬼の苦
 一も欺又不仁ある子に別して不便を語す如く今大王かのみまの
 業病を治て惣瘡を治せむ惡人あまは仏の御子憐れむるまは疾く思召して是れ
 に仏の法にまはると諫めけし阿耨世王の曰く今日惡日明日多病人者要重て
 如來の法の中に吉日良辰を擇むるは今大王現報の業病を治し仏の良医の如く其
 良医の値ふも吉日良辰を多くむべからん瘡を治せむと伊業といふ毒水と
 け二本とりに相燒ふ火の相文よむるは惡日と吉日と亦後かめと吉日惡日と



ようて日におよばぬ阿耨世王道理おぼえて遂に仏の正法お請て回心懺悔一知来を御一入
 伴日仏法とい善知識およまう善知識は仏道修りの因縁之爾王今日にお前日来る者
 にたれば是者導りまよふよりてあり如來即ち月愛三昧にありあり光明を以て王の
 身を照し入に其徳を察せし平心せり然るに如來法中先有選擇吉日良辰といへるに
 是き涅槃經の明文之仏語不虛妄は(何の疑ひも)其外は經文(の)と(ま)ま(つ)此
 文をいせり然まが人の心愚ろも力いりての物思をいひたりともそきを我宗より
 憑きとせしは却て非謬とある也他山の言を思ひに公方の授けたりは堅く物思傳
 へるにいておまをせしは(何れ)吉崎の教の物思するよりと他宗お將一公方
 向ても傳へるに(何れ)吉崎の教の物思するよりと諸寺諸山より如侍のこれを深く思ひて
 此条故以て門下に示す所おはして(何れ)修りまは教を承りて有るものと(何れ)物思
 けりりよ深く感心せし深及及して(何れ)物思つて(何れ)日(何れ)城(何れ)もひけりかおに(何れ)國主
 富樫政親去年一揆の後科より上人を首礼し(何れ)も(何れ)に(何れ)國中物思つて(何れ)ま(何れ)ぬ
 思ひの終にお教化つり(何れ)か(何れ)高田門徒或三門徒の群衆又諸宗の士民一統お既伏

一(何れ)より(何れ)越前口細口豆郷加賀口大聖寺(何れ)迄(何れ)ま(何れ)り(何れ)毎日(何れ)道俗男女農人樵夫漁師
 水主の秋まで群衆して(何れ)化導を(何れ)徳(何れ)す(何れ)ま(何れ)り(何れ)信(何れ)を(何れ)決(何れ)定(何れ)の(何れ)車(何れ)多(何れ)く(何れ)私(何れ)祖(何れ)の(何れ)清(何れ)思(何れ)を
 後(何れ)の(何れ)心(何れ)と(何れ)あり(何れ)る(何れ)も(何れ)是(何れ)偏(何れ)は(何れ)蓮(何れ)如(何れ)上人(何れ)の(何れ)高(何れ)徳(何れ)の(何れ)致(何れ)す(何れ)所(何れ)に(何れ)大(何れ)祖(何れ)淨(何れ)土(何れ)山(何れ)聖(何れ)人(何れ)再(何れ)び(何れ)在(何れ)世
 づては教化つりけるよと信せる者こそありたり利
 三上人北海萬里を眺て御詠吟並吉崎火災の事
 蓮師ある時吉崎の山嶺より北海を眺せしるに烟を
 限らばき風景より萬頃以天一葉の舟桃花春の夢花
 の秋もぞは口舌をいひ又漁舟を見むて一生養ひの群衆日
 むきの心とありもいひ又の(何れ)心(何れ)を(何れ)生(何れ)る(何れ)者(何れ)の(何れ)命(何れ)を(何れ)滅(何れ)して
 生涯を(何れ)る(何れ)る(何れ)漁(何れ)夫(何れ)の(何れ)羅(何れ)業(何れ)深(何れ)重(何れ)る(何れ)ま(何れ)と(何れ)は(何れ)度(何れ)多(何れ)陀(何れ)の
 本願を(何れ)入(何れ)入(何れ)す(何れ)ま(何れ)は(何れ)住(何れ)生(何れ)極(何れ)楽(何れ)境(何れ)に(何れ)は(何れ)ら(何れ)し(何れ)者(何れ)も(何れ)有(何れ)難(何れ)と(何れ)て
 ぼはく(何れ)と(何れ)た(何れ)く(何れ)強(何れ)む(何れ)吉(何れ)崎(何れ)の(何れ)濱(何れ)の上(何れ)も(何れ)遠(何れ)陀(何れ)の(何れ)む(何れ)か
 濱坂山のちた(何れ)ら(何れ)は(何れ)涙(何れ)の(何れ)う(何れ)つ(何れ)者(何れ)を(何れ)す(何れ)む(何れ)ひ(何れ)て
 蓮如上人



演坂の山のちからあふり波の騒がたりは法の家外
庶民の志は夕ぐさあは宿る者の群けは法にて

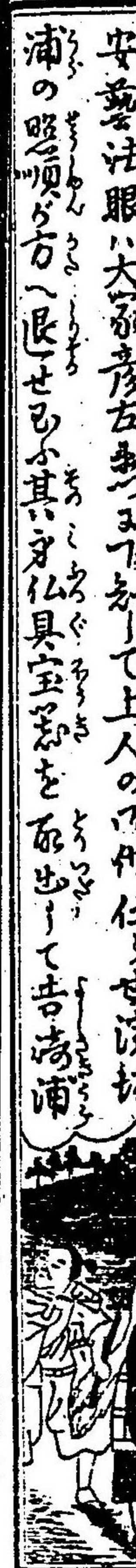
庵山の中をまぐる者の影は山に人もくまぬと昔は
演坂の山は法にあらはれてまよふ一柱を生るるあはれは

咸陽宮のせきをつらぬくも楚人の一炬まげつと成り
昇るに満きば朽るあはれ吉崎の深山空谷にして虎狼の棲こふらうと蓮如上人

荊棘を獲て一寺をば扉扉あひりしり北陸道の門徒貴賤群集して日に法教昌
まはるる猶文圃王朝念父子飯依いひひき法も清山こきを美次なる一は文明六

年三月十四酉の刺は南大門本覚寺の多をより出火してお市魔風
頻り吹立福も北のつらうつり竟る浄土は回縁及びけき下問

安藝法眼の大家彦左まつまかして上人の法住仕る世演坂
浦の懸頭が方へ限せむ其身は具宝器をあらわして吉崎浦



下りたる山上の草あまき水も自由あはれ門内の起勝も本
覚寺真宗寺若九て九箇も暫時の方に悉く灰燼とぞあり

なふさきども門外の多屋一軒も恙あふりなまき火は法ま
て上人の吉崎へは墨もたはれて室か三男元宿猶如火宅

の金言眼前とて寺をの焼亡を悲しみるの残りしり多屋
入甘ちり然まは如越の門徒より四月上旬お徳傳堂をぞ建ちま

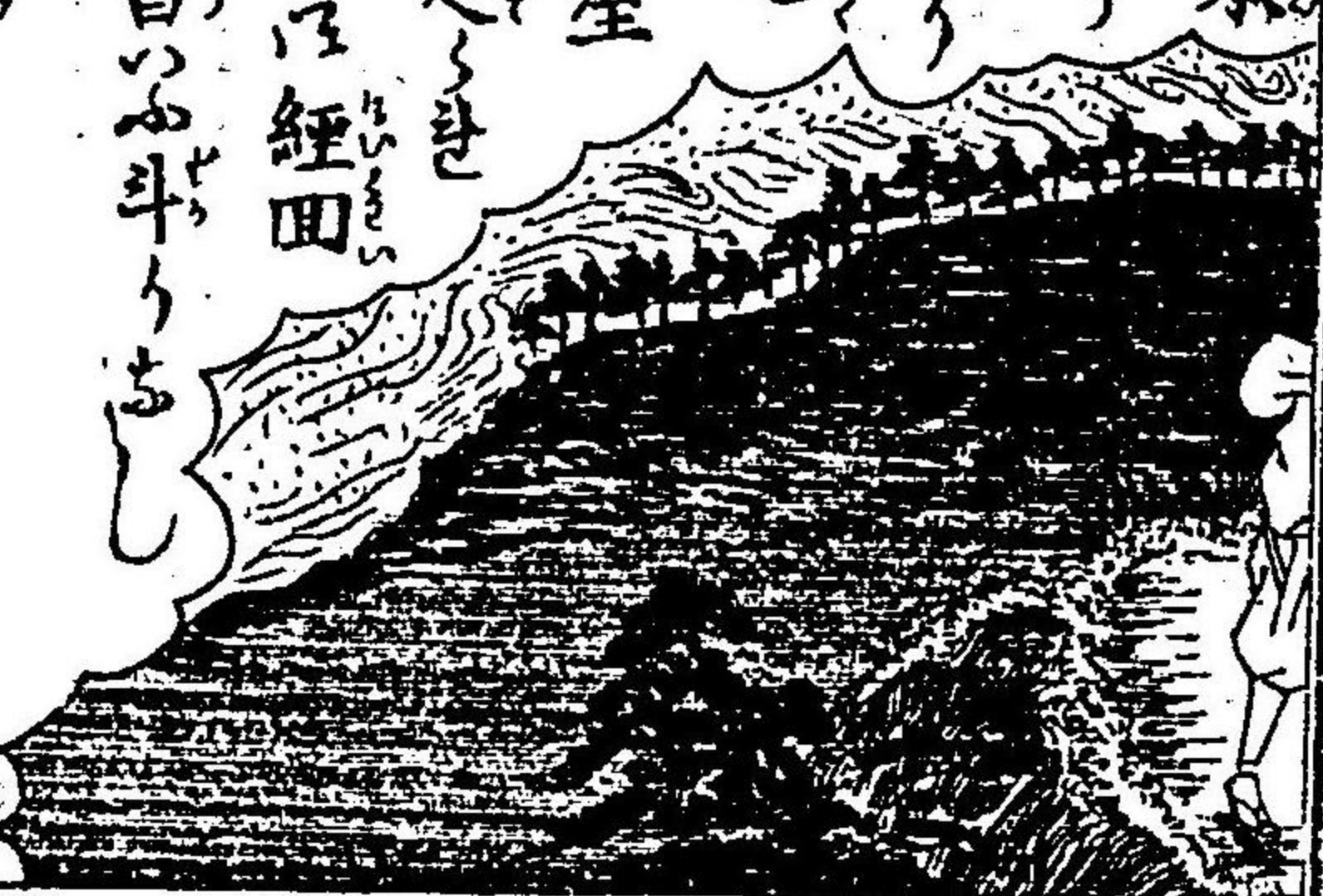
なまき上人姑且居住まきくしてけ向か如越も國の立所は経田
まきくして士民通俗居入通までい教化つらなまきは教条昌いふ斗りも

蓮如上人此年月四海戦國の直中おまは往事後事を思ひつゝ移も世の中い何れ
ある就る川まのめ見ももあはあたるあひ葉田家とて海とあるまど思ひ親ト

みひて迷懐の法書を海にひける其文は日
そまをらうふ人々の元業有為の轉衰を案すまにたくれなつらあひ眼を

そまをらうふ人々の元業有為の轉衰を案すまにたくれなつらあひ眼を

そまをらうふ人々の元業有為の轉衰を案すまにたくれなつらあひ眼を



おんかみ... 悪の... 見悟
 ... 年... 六十... 歳... まで
 ... 都... 山... 粟... 田... 口... 青... 蓮... 院... 南... の...
 ... 北... 國... だ... け... て... せ... の... せ...
 ... わ... ず... 年... の... つ... り... て... 六... 十... 一... に... あり...
 ... 二... 十... 八... の... 一... 定... 必... ず... と... あり...
 ... 有... の... 勢... 衰... の... 衰... の... 衰... の... 衰... の... 衰...
 ... 十... 八... 滅... せ... ら... し... 人... の... 意... 命... 五... 十... 六...
 ... 都... 山... 粟... 田... 口... 青... 蓮... 院... 南... の...
 ... ま... 北... 國... だ... け... て... せ... の... せ...
 ... わ... ず... 年... の... つ... り... て... 六... 十... 一... に... あり...
 ... 二... 十... 八... の... 一... 定... 必... ず... と... あり...
 ... 有... の... 勢... 衰... の... 衰... の... 衰... の... 衰... の... 衰...
 ... 十... 八... 滅... せ... ら... し... 人... の... 意... 命... 五... 十... 六...
 ... 都... 山... 粟... 田... 口... 青... 蓮... 院... 南... の...
 ... ま... 北... 國... だ... け... て... せ... の... せ...



死... 覚... 悟... 見... 悟... 覺... 悟...
 ... 死... の... 時... 刻... 一... 心... 一... 意... 必... ず... と... あり...
 ... 夜... の... 夜... の... 夜... の... 夜... の... 夜... の... 夜...
 ... 人... 間... 各... 各... 皆... 皆... 皆... 皆... 皆... 皆... 皆... 皆...
 ... 不... 覺... 年... 命... 日... 夜... 去... 如... 燈... 風... 中... 滅... 難... 期...
 ... 七... 々... 六... 道... 无... 定... 趣... と... 釈... 迦... 佛... 法... 僧... 三... 寶... 之... 中...
 ... 朝... 夕... 二... 時... 必... ず... と... あり...
 ... 信... 心... 決... 定... せ... ら... し... 人... の... 意... 命... 五... 十... 六...
 ... 七... 々... 六... 道... 无... 定... 趣... と... 釈... 迦... 佛... 法... 僧... 三... 寶... 之... 中...
 ... 朝... 夕... 二... 時... 必... ず... と... あり...



大明七年五月二十日

大凡上人北國ヲ在... 經... 回... 亦... 不... 信... の... 筆... を... 入... あり... と... 信... 心... 決... 定... せ... ら... し... 人... の... 意... 命... 五... 十... 六... 歳... まで...
 ... 經... 回... 亦... 不... 信... の... 筆... を... 入... あり... と... 信... 心... 決... 定... せ... ら... し... 人... の... 意... 命... 五... 十... 六... 歳... まで...
 ... 經... 回... 亦... 不... 信... の... 筆... を... 入... あり... と... 信... 心... 決... 定... せ... ら... し... 人... の... 意... 命... 五... 十... 六... 歳... まで...

思ひすゝの御更容秘蔵も女一人ありて上人の値する以上なるものなり此地在
 五百半已為す博覧強記の女に及上入此所は居住侍るなり願はば珠陀の本堂
 を化すべし此上もまき候ふこといふ事上人安敷くもひひとて法を以て法に縁
 かして今幸お侍堂を造建す所此地在去きて弘法のお後神と成仏法を
 昌の靈地とありて花三合の暇あるまを守るべし法はゆるぐは美化され
 彼女も顔よりなりくと泪を流し今尊き善知識の値するもの前電乃浮木様
 是の年の初め何の事かやあらん哉とて法にゆかたを合の候の旨といふ事
 此後寺永却退轉あきなり擁護ももつて固く諾うてかき清やうは夫あり是
 ようく侍堂書院厨室を築成美ししく建てるべし則今の光吉寺に
 (五) 堺御堂は建立並唐人末朝にて蓮ののち化を受るもの
 文明九年丁酉十二月廿九日上入六十三歳をあせむひては口より
 六十あることくくくく年のつりや珠陀の法法をまき候ふ
 願はば珠陀の法法をまき候ふ
 願はば珠陀の法法をまき候ふ

願はば珠陀の法法をまき候ふ

いつまでとある月日のまじりへあまやへ一かみのくくれ 全
 持付國多下那海咄お佛懸ちとあり此住僧平生連分比のみ心をうつて
 仏法お徳の方うとくくく上人思召やう此坊主を人を法義に入ふ人多く
 の人の為なるべとて言ふ書は一途の事をこくく著し三首の詠分を添ふ
 是薄吹計本原といふ所は松をむひぬ佛懸ち九百
 在家にありて通までこきさひろひ願て出口へ持素
 一けき上人聖者の心をあを悲しみあをたれ
 も風隔はよせて法をまき候ふとて法に益あり
 終に佛懸ち信心堅固の行者とありその言を白
 心とてひも佛とてのむらりこと 蓮上人
 まことの法をかまふことあまき
 つみちかく如來をこのむおあまき 全
 のり世がよあへこそゆけ



法ほうとまきくとまきく及及びふふこころろををささごごむむ事事ににももたたすす所所はは法法陀陀仏仏とと唱唱ととそれそれ連連和和上人上人
 蓮れん阿あ比ひににまりまりの時とき身みああ場ばのの身みはは下げ向むかりりてて今いまのの世よにに天てん下げ勢せき盛さかふふととされされ所ところこ
 小こ津づ寺じをを建たてて僧そう令れい兵へい乱らんのの禍わざはひをを破やぶつつせせるるここもも所ところををかかへへてて弘こうくく化け益えきせんせんとと塔たつの
 津つはは推おしてて一いっ字じのの法ほう堂どうをを建たてて立たつつてて坊ぼうくくはは下げ向むかりりけけるるにに一いつ日にち契せき丹たんのの人ひと塔たつ
 浦うらふらるる初はつめめ上じやう人にんのの教きやう化けをを修しゆめめるる事ことにに昔むかし昔むかしのの人ひとのの骨ほね子こをを共ともにに葬むすぶせせばば悲かなし
 このこの後のちありあり親おや世よ善ぜん井い小せう後ご生せい喜き程ほどをを祈いのりりけけりりにに新あらたまま示し現げんをを受うけけ其その告つげ言げん
 汝なん日本にほんにに依よるるべべいい念ねん仏ぶつのの一いっ門もん教きやう志し昌じやうのの宗しゆ体たいなりなりそその教きやう化けをを受うけけ後ご生せいのの一いっ大だい師し
 をを定さだむむべべいいととぞぞとと身みををままりりてて縁えんをを求もとめめてて埋うめめるるはは坊ぼうをを修しゆめめ上じやう人にんのの縁えんををままりり津づの
 青あおささやや上じやう人にん宮みやう主しゆ是これ倫りん二に家け宮みやう主しゆ是これ倫りんのの時ときももささりり薩さつ摩まのの告つげ言げんをを受うけけ他た力りき
 難なん思しの本ほん誓せい九く愚ぐ直ちく入にゅうのの事ことををりり懸か念ねんふふすすららむむひひかかばば故このの清せい油ゆをを修しゆめめ即すなはち六む字じ
 のの宝ほう号ごうををままりりとと頂てい戴たいしてして願ねんてて契せき丹たん國こくをを功こうりりぬぬ上じやう人にんのの法ほう水すい本ほん朝てうをを溢あふれれてて其その城じやう
 をを河がするするのの不ふ思し候こうありありるるゆゆどもどもももありあり
 ⑤ 山科御堂やまのりのの建たてて並ならびび返かへりりはは越こええるるはは詠えいのの変へん

山城國やましろのくに宇治郡うじのぐん山科郷やまのりのさと小野庄おののむら野村ののむらのの西にし中ちゆう小路こうじのの敷しき地ぢのの末すえ田でんをを修しゆめめるるはは文ぶん明めい七しち年ねんのの九く
 月つき吉きち清せいをを立た退たいききるるゆゆてて後のち持もち前ぜんとと出で口ぐちととふふああ三さん年ねんのの乃なり出で橋はしををトトもも是これ江えがが金かね
 ケケ唐たう弥みやとと人ひと通とう善ぜん徒たとといいふふ人ひと前ぜん住じゆう存ぞん如にょ上じやう人にんのの以よ代だいよりより大だい谷たにににままりりてて深ふかきき信しん者じやありあり
 るるるる分ぶん或ある時とき出で口ぐちのの因いん窓そうをを修しゆめめてて申まをささきき
 山科御堂やまのりのの建たてて並ならびび返かへりりはは越こええるるはは詠えいのの変へん
 建たてて立たつつるる小こ室むろをを勝かち地ぢなりなり都みやこ鄙びのの
 乃なり俗よくをを修しゆめめるる便べんももよよりりとと再また
 三さん十じゆう上じやうふふままかかばば其その地ぢをを修しゆめめるるはは文ぶん明めい十じゆう年ねん
 正せい月げつ廿にじゅう九く日にち蓮れん如にょ上じやう人にん六む十じゆう
 四し歳さいの時とき時とき河がみみ出で口ぐちよりより
 上じやう洛らくよりより大だい津づ迄いたりりてて松まつ
 へへ通とほるるのの初はつ山さん科か安あん祥じやう



古ふる村むら門かど下したちちままりりはは少すく時ときはは深ふかきき信しん者じやありあり
 るるるる諸しよのの諸しよ人にん群ぐん集じふすす
 るる年ねん 稻い麻ま竹ちく葉はのの
 如ごとくくここのの同どう郷きやう砂さ村むら
 ととふふ者ものなりなり上じやう人にんのの以よ代だい
 のの幕まくら下げ遠えん良りやうのの刺さし吏し
 海うみ老らう名な遠えん江え智ち子こ
 孫まご海うみ老らう名な五ご郎らう老らう者じや
 ととふふ者ものなりなり上じやう人にんのの以よ代だい
 四十七

なご慕ひ信心堅固のほつ後とありや上々幸某田領地を并本村といふ四五町余の平地ありけり此地御建を建立せしむるに可成りすむんとぞやんるこそ別先まきる跡七入通りや上上揚地あり上人宿願の跡本と斜ふは昔候まりて別筆輿にめされかの地を見も少く本堂竟の靈地ある先時地を也試ふるべとて塚ありなる小房を石せ假しは房を立るひては化ありなる貴浅群集ふける蟻の集る如くあまは上人は限りは(海老名五左衛門)今の西宮の祀あり初て文明十年も移あくる言われを上人近松は越年ましくては口号うるよ

六十のりごとくり途のよらひやまやちん老の夕々れ 蓮如上人
 明き文明十年正月の雨つと降我のいりうううう
 かのう後句をあされるも同に五口に二檢校とありて思れあうり口を附さんと
 西宮あとの四方乃梅の枝 蓮如上人
 二一檢校

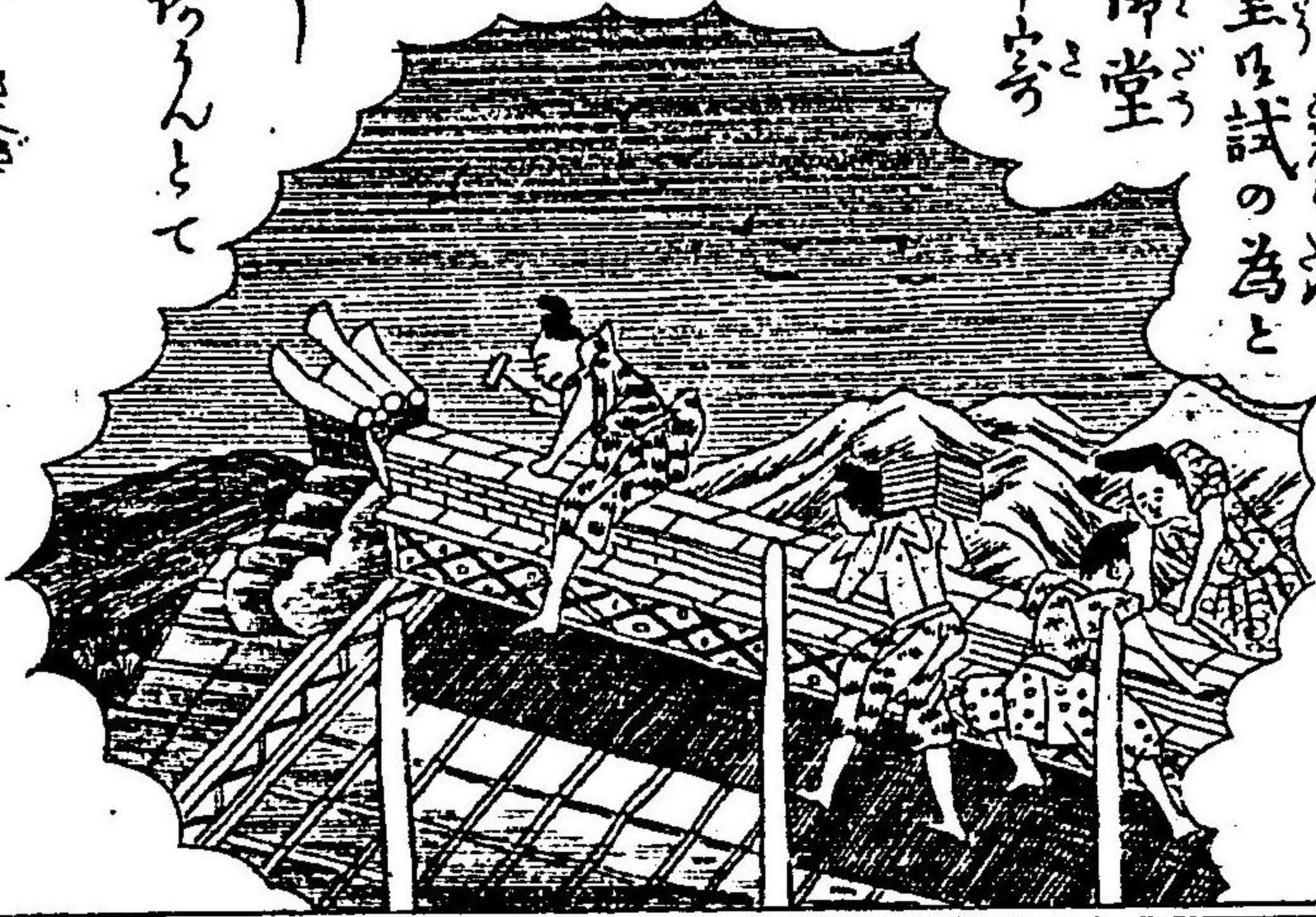
同年の正月十六日より地形を引おし四圍の杉木を植させむひ三月の初の夜又櫻より古き坊舎のちりりをもこみ引せむき寢殿ふちりひちんとを四月廿八日より柱立ち下りて八月おまほひ桑山泉あまを成結いけきば上人は悦ちりて九月十二日の夜寢殿あかりしけるに月清くう小室隈ふくむる二千里も外あり御殿の廂みさへ入り庭の面も藤く見へけきば

ひくりはあまの月のけ 蓮如上人
 ① 御影堂寺造営並吉野山の材木上る事
 上人つくと思召まけるハ杉の如く寢殿厨を成結いけきば急き杉を造営もされと思召て先ツ近郷の門下中へは觸ちりりきり同く二月中旬



和石河内の門徒吉野山へ拙を入れて掛五十余間上りまうける勢てその
 年にもなると明る文明十二年正月十六日より影堂試の為と
 て三五敷の小堂を作ては覧たりそれより二月二日佛堂
 の手斧初たり雜木等ハ近在近郷より運送し空
 附くまら既ち三月廿八日の棟上のは後儀敷敷すふ
 ちりて内陣外陣の板敷の良材ハ大津より運び擔
 板ハ篠の木の神木を買おめて四月四日より
 松皮昔ふ所かより十月四日ふ出来せり造作ハ
 四月廿日より八月中あまは日も永き候あまは番
 匠の手方もまらゆきていと壯麗ふ成就い
 けまば上人のは教ひ佛門徒の満足る人やらんとて
 糸集めあまらる

御真影御遷座並三井寺より御真影を遷る事



山科御影堂社殿に成就しつゝはまは八月廿八日に繪像の本尊を
 假の厨子に移しより西京寺に宛て御移徒の儀式調ひ扱其夜ハ上人も
 佛堂に宿しむひて仰ける扱てく年来の本堂今すま成就しける
 京鄙と經回しけるゆゑも心中と思ふかうはまき存余の内
 小の親堂と建立して心安く安良の往生を遂とやとを祈せし
 る今宵成就せりとうきく尊く思ひまらる方までハ
 後ま目も合は夢も結ばずて通夜は怪中こと傍りきき扱
 御書の莊嚴も捧め結ばずは成就さききく將軍のは巻を
 もは糸浦まうけては親書をは傍り其上上人のは化尊を
 聽す一むハ世書出世とも目出なるより日を逐て白
 壁も塗拂ひ境地の地形も平均に引あして免角すよちす
 一月十八日よあまは今宵大津返以ハは座あされらる聖人
 骨肉のは親像を山科のは堂に遷座せんと其由を



三井寺へ後をされりまき寺門の衆徒異議をりかけし真影を山科へ遷す所トきて
 遷りたる其由を尋るふ文明三年二月より以影像三井寺へ入らせりて今年まで十ヶ
 年の間の諸國より糸指日々に夥衆して寺門の境内に入りて彌勒の出世しよ
 ちと怪びおるをよ今山科を遷しよ三井寺の衰微あるべし一山會合してはす
 けりとぞ拒ける其時上人位せざるべ然し其身の形像をつくりお替へりて後
 ふ元之如く蓮淳法像を置るべしと色に御信言まきりて遂は真影を志
 おく山科へ遷すべしと云ひり

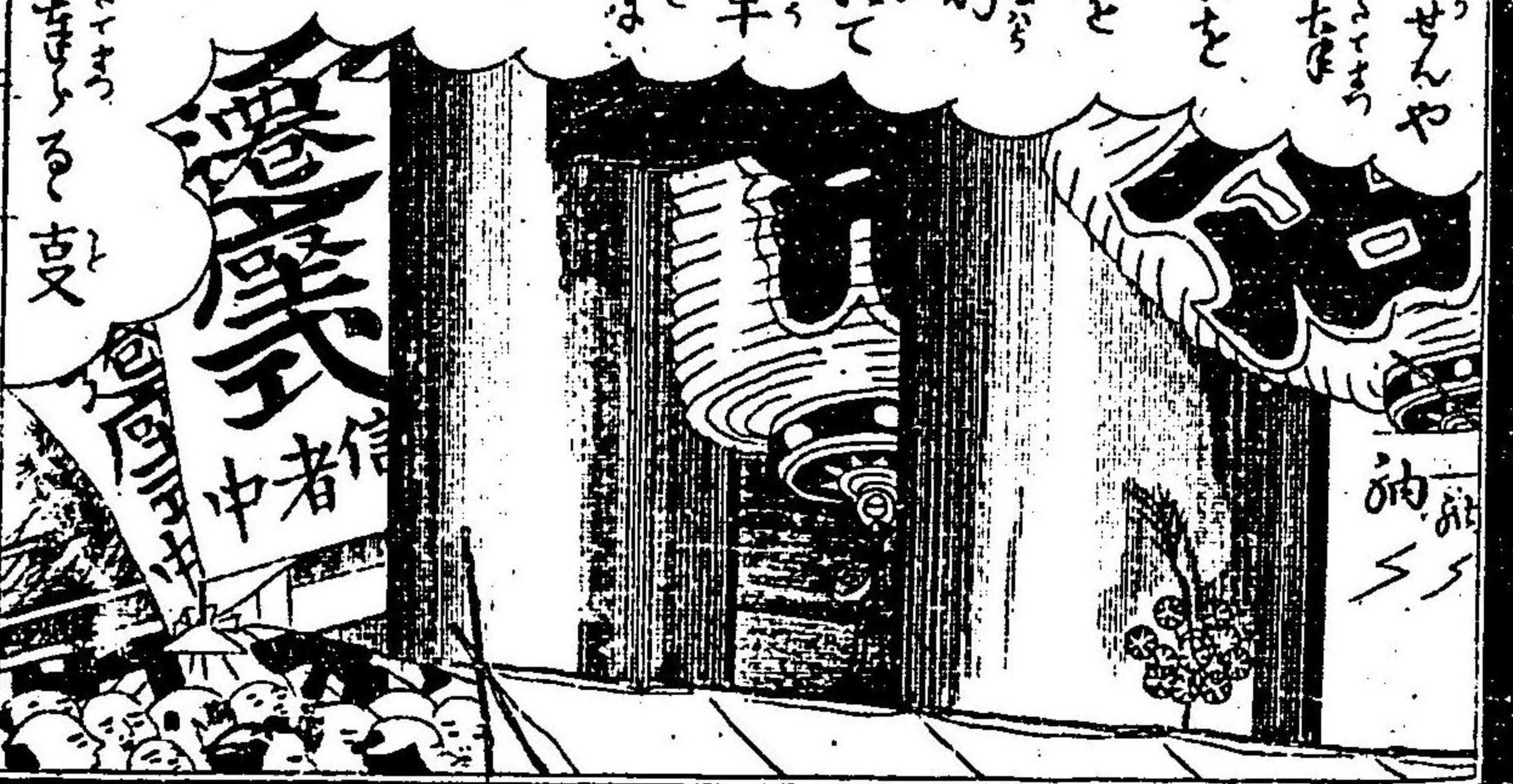
十九 山科にて七晝夜の法會初て行る並三種の神器の御誓の事

蓮如上人曰今こそ本願寺浄土真宗の本寺と申は山科の惣所にて日本に於て親
 鸞聖人の流義を承りて一は別きところのへせ御真影のありはす
 此を本寺と申す其故は覺如上人衆專房に在るべし故邦抄の
 中に祖師の御本所を淺如く及びつる建立の私の在所を
 本所と自称する冥如を存せし利益を思はざる族大



憍慢の妄情をもつていさなり仏智无上の他力を受持せんや
 やと宣ふたまはれ方にはすとも此の像を安置しよ
 る所こそ本寺よまき忍多き忍多き忍多き三種の神を
 奉りむいさき王といはさるる如然き今に御真影を
 三井寺より山科へ移しよる所の味いさよとのひて別
 今年十月廿一日の道夜より七晝夜の法會山科に於て
 始ては修りよされは消滅の趣を山科に建立の西文章
 正に記さるる其真影今西宗も什室の随一あり最
 文明三年四月上旬より御真影大津より遷りて
 務いごかこへ經回しよは本地に何地をりつて本と
 まべきぞと人と覺来ふく思ふ所は今年今月一に
 居住しよるの有難やと比人土の涙もむせびたり

山科阿弥陀堂御建立並寶祈延長を祈りまはるる支



同年十二月中旬の比より上人思召立るの事既成孰しむ然まば本願寺元
 來勅願所にて他異ある寺あきば此上ハ阿弥陀堂を造立して先帝の御菩提
 當今の寶祈を祈りまんと思召き又吉野山へ此旨傳きまきて阿弥堂の柱二十餘
 本つづへむ既ことしもくきて文明十三年もあつたせは正月十日
 吉野の材木山科へ到來りも因茲二月四日手斧始りめりて同年
 四月廿八日棟上の祈儀ありて六月八日又假仏殿を志つた御
 移徒の規式執りせむ幸あつた今年六月十八日前住
 存如上人の二十五回忌まつらせむひたまは十一日の迄夜
 より七昼夜のは執行法事あつたよりて遠近の門徒
 わきまゝと群集しては坂見目の体いしは百倍せり
 又其翌年文明十四年正月十七日より大門を再建立
 ふさき四方の並樹塙築地鼓橋鐘樓茶所將
 輪花橋の等まで今年とくく成孰せり又もたつる

文明十五年五月中旬日河内國古市郡譽田の
 野中の馬といふ瓦跡をばて瓦を焼てとくく九音小
 ふされりて文明十年ころ今年八月まで六年のる
 而御堂書院基所集會所外部屋々まで残るは
 成就せり誠は莊嚴いと美麗あるとを葉は冬
 がく今世又異國ハ知れ日本國ハいふふき大伽藍
 こと貴賤賞せんそのいふうりたり



世てに多あを以て易の道を教む並蓮子内親王和歌の古文
 蓮如上人諸堂成就の後ハ秋の爲時とつ徒を集て修らまをハを仏を懈忘す
 ることありとも往生すまきかと疑ひ歎くべからば弥陀如来を一度おとまひせり
 往生決定の後ふまは悔意ありとも浅きやかる懈忘をありのおきともはたすけハ
 治定のちががやくと収む念仏を中ころを他力大行のは信優あつたといふ念仏中へま
 こと修せらまはる時つ徒の中の内一人は死なざるハはたすけありたるのちうらさるると念



仙中ぐや又はたすけらふまほ古又のちうごさよと念仏中ぐやと尋けまひいじきも
 一但心定聚の方にはたすけらうと候ふこころ滅度の悟りの方に侍たすけらふ
 の有難きまよかす心こけきも仏よあるまをまほごころよと候せむひき又阿咄山科
 の御中一農夫らうて兄弟の女を拵つて家窮て食さまども弥陀の本願を皈入し
 時と上人の教化を聽受して仏恩を謝の称名を候びける初て是等の風道に
 て二人の親をちかく夕の露と消ある兄弟のむすめ詮方あく同居あり
 里長日蓮宗の家まほ公一偈の日蓮親の教まで称名を
 候ひたる此家の主人かま法華宗まほ決して念仏をバ
 禁しける兄弟のの仏恩をすまがくやちうらん田植方
 曰挽物挽の時も称名の代まほすまほそやかのるまを
 起すゆつてま公を勤けるまどもくまて梅白ふ春
 にもあまきま教入とて一日よりの暇まほ山科の山堂
 にもあり上人の勸化を聽受し候は神の海とあるまで稱



名を候びける法座も終りけまほ諸人は皆く退出し
 けるは兄弟ののの法座にひまふ一考を上りて泣居
 る上人怪しこむひ二人の女子は何ゆへかく涙哭ま
 るぞと尋るへかの者つゆやう両親の教まほ任せ称名
 念仏中けるが親ともまほちうて後日蓮宗の家まほ公
 一偈かこく念仏をまほトやさまほらゆへ方よくまほまほ
 ぞやかのるまをと称名の代まほな不唱一偈も今日ハ法蓮は詩一
 思ひのまほに念仏を候びしう言まほ日をい又まとの如く空を
 唱ふる悲しさよとてかく慈傷ま及ふありとふ上人是を聞し
 市邊をまほく涙しむひ善哉一称名の代まほ志まほいぞやかのるまをと唱ふる
 る佛も知見をいつて志ろしり候るまほ疑ひなく極楽往生まほ信心堅固の
 月行こと賞嘆すまほする限ありまほしなまほ神もまほ志まほられぬぞかのる
 まをと唱ふるまほしこまほて易りの道ふかまほるまほしなまほ信心お續まほるまほ



まこと教ふるべき終つては於其身より自他の名を捨ておしむる凡の及ぶ所は
 べと世に世は美嘆せざるといふはしるま人も此例にうつて内親王伊勢賀茂の育
 宮齊院は立せむる景行天皇のまどまりも其の時忘言あり佛を中子といひ
 鐘を漆紙といひ塔を石良く伎といひ寺を瓦葺といひ僧を髪長といひ尼を女髪長
 といふ是延喜式不出より詞花集雜の歌は選子内親王賀茂の御宮はときこる時村
 名の代り西はむらひてよめふ

選子内親王

詞花集
 へどもいむとていせぬとふればそむきて福をのこそふ
 三 大政御堂寺草創 並 聖徳太子示現の夏
 撰め東成郡生玉の庄内大阪の坊蓮如上人八十一歳明應
 五年の以草創つて靈場あり第八男實如上人へ寺
 務を信懐あされ山科南殿へ隱居すくして信證院こそ
 申さる上人は時河及出口へは渡駕あさせそれより富田
 溝抗多山野宮ふとの辺へは出歩つてひ泉石塚平地又ハ



佐野加祥寺貝塚へは徑回つて人民を化益する以上
 洛抄ふり二月廿二日ありたき天王寺に詣りむひ係ら
 れたるやうに扱ひ四天王寺と申ハ聖徳太子廿二歳の御時守屋
 の逆臣を誅戮の預成就の後建立しむり主造は始の橋の岩
 かりるを此地へ移されたる亦も聖徳王ハ救世觀音の垂迹あせい
 此土に示現ありて仏法を弘通しむる觀音ハ西方淨土の股士の菩薩
 まして弥陀ハ果上觀音ハ因位あまば因として果を尊みむ故に宝冠ハ弥陀をい
 たきむ其うへ此地ハむらゝ親尊轉法輪の勝処あり是時太子ハ長者の身と成て
 如來を供養しむる刻も今此宝塔金堂ハ極樂淨土の東門中心に當るといへり然ハ
 天王寺へ來詣の人ハ本地といひ垂跡といひ太子の御本意あまば弥陀を信する人ハ大
 子の意こゝろにもあふべきたとひ百度千度奉るといへども太子の本意は達
 せざれば徒らあるべし然るも當流の行者ハ弥陀如來をたのみ信心決定して往生極
 樂の覺悟を究めざる由は太子の信心まかなふべし信心お續怠りあくと示しむハ



五十九
 六十一

人々感涙にむせびくる上人天王寺より玉造のからへは越ふされ一日何れともおく十四五
 歳をうり見まき人あつて上人申なる愛まよき寺地りの一覽あきれ工字を以て建た
 るべし此方へと唱ひまゝ上人此見と伴ひひて山上はゆる遠見はまは淀川漫こ
 て八功德地を表す西海の潮の雲うつらあつて日想觀をうらう千船の往來も自在
 して陸ハ金剛山につきて法喜井の淨利は憐り葛城高間の山登へ西ハ摩耶の宮
 根兜山六甲山なる海濱は三犬女の浦須廣明石の浦月落かゝる淡路島山まで手に執
 こく此地を饗養應の風景おれ誠ニ園池壯觀の地ともいひつべき天晴此地ハ御堂を建
 立せむやとほこつを究めむふと勿心ちかの見入る夫より此地ハ御堂建たむと
 時き多く奇端多くうらまきハ今の見ハ心く聖徳王の化現あるべしと皆人中のへり上
 人の隱居の後ハ只假初の事ま付ても自心教人信の思召の外ハ他支あうりき勤て明應
 五年の秋九月より彼山をひきき地球をまぐる時法安寺の兩僧難じて明日ハ大惡日お
 まき初て伽藍真行の日ハ然るへう辰とかけき上人答て如來法中無有選擇吉
 日良辰の仏説を疑ふべし辰明日早々ハ創むべしと土石を掘地面を掘ちるは日不



子の後身にて渡らせ見ふる显然らる本願縁起に曰吾入滅之後生比丘比丘長者身

世音にてた

思議なるお佛の泉涌出り又礎石瓦等よて土中よりとて出現
 す無て埋藏置けるが如きあり木材ハ吉野山より運送
 一石ハ御影里より船路にてせり工匠ハ都鄙より
 聚りまりて不日ハ御堂書院門々堂所皆迄
 成就しむひたる

三聖徳太子未來記 並本願縁起
 の文の事
 天王寺に於て聖徳王の未來記を見り
 未世に到て此寺の東に當て仏閣建立する
 即我後身と記し置せむ然ま太子ハ
 本來觀世音の垂跡上人の御母公ハ石山寺の觀

賤身弘真教法救濟有情是非他身吾身耳矣又玉造岸西方瓦燒置二万枚埋藏竈
 穴至修造時鑿取用而已云々此を思ふは礎瓦の土中に有りたるこれ太子の埋置も亦
 明りにあらざるを以て之を以て文の往昔の宿縁淺くは因縁と書せしき又如何なる約束
 の有りけるやと宣ひるも真に所由なりと思ひ合されしなり

苦蓮如上人御不例並下問法眼安善勸氣御免の事

化野の赤松鳥辺野のけりり岩なき風貴賤を扱はば生死必然の道理あり由へは
 梅檀の烟をまぬきむらば十惡の提婆も無常の風道る多あり四大成の形五蘊假和
 合の質みふとらば磨滅の期なきは上言より下万民はるるまで
 進まぬは只この一ツあり然る信證院法印權大僧都兼壽蓮如
 上人八皇百二代稱光院御宇應永廿二年乙未大谷にて御誕生

まろく百四代後土御門院御宇明應七年戊午上人八十四歳の
 四月上旬より御違例まりくり上人宣ふ春すぎ秋去
 て當年ハ明應七年孟夏中旬にもありぬまば子の年齢積



りて既ハ八十四歳なり然るは當年に限りて殊の病悩

まありさるる右眼手足くろ安らばはこまきあり
 定余の至りあり又ハ往生極楽の先祖と疾く覚悟せしむ
 處に諸存生の中は存ねやべと宣ひるは同月十九日板坂
 光近將監といふ醫師参りて脈脈をうかひは薬をまじりて子
 御食すいたは澆湯をうすし召れは同五月廿八日正集詣



抱され已後の由仕をも申しは六月六日に好山野黃門基徳郷光臨
 有りて上池院を召具しむて敷刺の物語り有り醫師は薬を調進しきまども更其
 險なりは上人度と作しきなる賊縛比丘脱脚於醫王遊乞食沙門彰鶴珠於死後とふ
 戒文を修しきまども是滅後ハ不思議を有りしむかきはるる事と後こそ思ひ知られり
 同月八月下旬下問安藝法眼北國より上洛して上人の御勅氣を伺ひきり衣掛御存生の内
 には勅氣は免れり未來までの面目にまきまらばはとて漸く久し落涙し御近習衆を
 けりりと説言の上りかハ上人宣ふは汝ハ未來永劫すも勅當に今度北國に於て合戦の

義言語同断の深才去あう重ねて北園に下るまいたをあらふ不便のる諸法園提思
 皆往の弥陀如来の本願あまき何程の悪逆あうとも回心の上子細あるべしとて赦免施さ
 まり法眼の前へ召出され尊顔あ増しきり感涙を流し御病体とうなひまの退出しけ
 る上人は建化の後中陰の法眼も上人當年の冬の頃より宣ふ明年三月に必ず往生すべし又その心
 得まで信心相續意するあられをかへさくも御教訓拾されたる

其上人御病中あが山科へ移りひかる並吉野の嶽を献けまは和まのる

明き明應八年二月十五日宮ふわき大坂に於て往生せんと思へども思ふ言らまき上洛して
 山科に於て往生すべし空善急きて山科へ来るべしと傳せけまは空善かこまうして
 其意を承り即十六日上洛して其用意をせしむける上人は十八日大坂を御立あされ道
 中静まはれりつて廿日山科へ入御まりしる明る廿日影前へひ来る
 つつ仰せらるに今度ハ不思議今存へ依大坂に往生すべき
 変はあせ今一及聖人の御思願を拜し奉り度及び大坂より
 二日着上洛申あし高勢まひて感涙あまひる座中の



入々各袖とそ濡ける同廿二日より御往生所を移し

造建あひ廿五日に四方の上居を手裏あめて御めぐりり

伊勢土居に御湯を召あれてし潔く御歡の言色ま

ま御門後の面御余波をあみり同廿七日御堂へ

御出座よりして飯堂より手裏を後あみり昇せて入せらる

三月朔日に北殿へは出あされ実如上人並御連枝方同席ま

りり数刺物語あされ我今汝等への遺言に更餘るはは

唯信心を決すなりと仰せらるる同二日以下間五郎光あつは仰付

りして櫻の花を御覽りたまはれたまはる翌日吉野より極を奉りたま

上人曰御堂の四壁にも若木の挿りしとて今此吉野の花は名所の挿ありとつり

あつてつらつらるるびみり花も又つと散りしきぬの故き

老うの行あてかやあやうはへや弥陀の浄土へ

今日あては八十五にあまうあうの久くしとあまやみあく



と口蹄々ひらり誠運日の御長病に侵るまひて御衰老の御気色こころ不仁民まじりま
 せ此三四年の向御身躰むやりの如くまひらけ耳目朦昧にて色を見まじりたまはるる
 分明あはれと仰ふる。度は大漸の期近づきまひて二根明あふまざる日未だ超させ
 りひりまひ見聞の諸人こふ随喜し奉らばとつるあふ。時又慶嗣房や上より一
 上人は遷化の後大阪御房を以て御本地とてまきや山科御房を以て御本地とてま
 びきやとまされ一か上入作らまてさふ大阪山科に隈らば邊土遠境とつても二天無二の
 御眞影あつてまはつて本寺とてまらざれ吉法出口大阪坊に居住す
 ついごもまはせ本地とつるべふまはつて時即近松は眞影入らせ
 るに近松ま本地とつるべふまはつて時即近松は眞影入らせ
 山科と今今本地の出口は居住せし時江原坂田の法住房参り
 ける其時は空然房法住は對とまされらる見せてまら
 まより及支有推く存及跡まて及不どは天津返松ま
 まはゆすは眞影へは礼やまひてわたさんとまけまは法住



申ける、御影、何國まはるはすも同るにてまはれ我上人ま
 御對面を中ままりなとやけ時空まける、御影、何國に
 まはるまも同るあふは堅田邊の御影、何國に
 人、たは、此水辺の草深き草屋の中迄参らまはるに
 ちるへらぶだとしりり、法住房返答あうらま我
 此支貴く思ひて文も書通付く、然まは本寺とてま
 べけれ我、其も守職、已後ま推ても此御眞影のほらまはす
 所も本地とまはる、般勤又仰らまはる、同七日の曉御自朕を匂ひるひら
 くらひら、嬉しや遠所なり、往生近付ぬ法然上人の御初、津土を頭おけら
 病患とほて偏へまこまを樂しむほらまはる、今我身の上と思ひ、られら病
 りらる、なまはる、も樂し、思ひ、か、賢、藤左、心、をうか
 する、お被、胃、の、氣、の、御、脈、違、ひ、み、ち、と、申、上、ら、上、人、さ、ぞ、と、覺、ら、う、と、作、せ
 らまはる、扱、暫、り、り、て、今、一、度、御、影、前、へ、は、れ、ら、る、ま、き、と、て、は、老、邁、疲、倦、の、ま、は、ら、る、



御病床の衣服を脱せしむ新しき衣裳を着用おされ腰輿よりおろて老本堂へ入らせらまはる。御影珠ありてそまより東の椽側へ昇出はせしと仰られ庭より御影前へ参りちりて聖人の御尊像に向ひ今生よての拜顔をれまてあり心かの因よて真身より抱きしめしと懇願のこゝろひなきお人にお神をて候ふぬいありとあり

御辞世御詠歌の支並病床にて御物語の支

上人御飯堂おさまんとて堂前の花を見ゆは色もく白き難の朝のおおぬまで願ふききを見ましめてちのちの風流かた常せしは昔の心面より丹後の法眼金第上野助その外御連技中業を昇まより還御ありまいつせなま合テハ本懐満足こと御喜おさまき御病床より臥るひては辞世のほおす

わは死あはしつらなる人もあとのに頼りては、此世をたのめよ 蓮如上人
 八十五ツ定業きい中の 我身やのち愈いし手はせぞぞとて半の全

同九日法教房空善房加及小松の了孫子とて教討法義の御物語りて上

人言ふに空善のい参らせたる尊の嘯の音をきひて法をきひて身おぼ

法をきひて鳴り人間として上人の御門後にてありあがて法をきひて身おぼ
 鳥はよおぼし此鳥の法をきひと嘯るをきひて頃日に心を慰まはる
 然れども電も入まざる不便に竹舟へ放ちてゆれしものひ
 けまに空善取て教へ放ちける上人曰く此頃、鳥籠の内が
 さぞ迷惑と思ひをけまざるの法をきひてと鳴りあり
 さよとあやうに思ひつるぞや今教の中へ放ちけまはる時候ひ
 申さば一是あつけても人間の六道田生の空電の内を
 西方浄土の廣き竹林へ放されまら如くたたり候はる
 かるふんと方ひ空善申ける、いよまをきひて有るま
 御教化の御影と悦び申さき、中の人と感涙をぞ候ふる

御文は徳圓並御秘蔵の馬を以て見せしは、又
 上人又慶問房を近くめされ何ぞ誦て聞せよと仰まき候はば御文を



よみまゝんとり上りか上人然るべしと云ふ因是大阪寺建達の御文を御讀
 しまり二三返りみりけきに御教房代りて取上人派の御文二三返り讀ま
 上人の御文ゆりか思議や我作りたる物あきとれ殊勝の覚めりごとくは
 破る存せんとあざん中より百を撰百の中より十を撰十の中
 より一を撰り凡夫往生の肝文を撰りみり耳ちりよむは口かき
 かうは書記の御要中の要文あり自ら殊勝こと作
 異議もひて文と申すべきと宣へり又一日御和
 四乃の内にお二聖を上げて侍寢殿の際まで引かせ
 て侍見りしに此馬前を延て涙を流し頭を垂て
 上人の御文を撰りて上人の御文を撰りて上人の御文を撰りて



けるハ誠の畜れあまひも上人を見奉りて涙を
 流しける不思議ありとぞ中なる日十日そりて
 起上らせむ御病中の御容貌を圖画に書せられ其
 御影像を書附せしめ銘文あり
 護一念信 今詣安養 藏身永絶 法性速證
 と撰りてそれより病氣重しせむ日中旬の頃には容
 御影前へ移し申へり年来同様の入に佛法のよみまゝ見し思
 名聞ありけり我遺骸を見る人々法義おも入らせんとはなる日十八日の
 我まゝの兄弟和睦せし信に中の中の一の法流
 日よりハ脈ありせむり廿四日に頃て御往生とて法教房空善房は傍近く



まづて御足さのへくか上人曰頓て極樂にて北面申へり繪像の女をと思はせ
とまふこれやとて屏風にけりか今生の御眼をありて津土に於て真身を相し
まふんとて法敬房も空善房も目もくれ心も消入せりあり

廿六 蓮如上人御遷化並 御臨終に遇する人々の事

三月廿五日の曉に大地震鳴動し朝日の出る支頻にありか八見圓の諸人不思議の思
ひを成り是則権化人滅の瑞相なり時つら夜も明をあせぬ上人存せりしころ
命を期たすと空より日光東嶺に昇り清虚雲晴て音楽空におよぶ金色の光ふ
覺す前後に聚る一族親厚の人々も五體を池に投て涕泣咽涙せしむる時あり然
るも又山科郷の内別と野村の御事の前後左右の草木の若葉おさめ巻く枯く花
も洞とて地別を悲み山野紅りの禽獸も足をとめ羽翼を垂て
倫大聖世尊の御入滅の時も異あり終に明應八年己未三月廿
五日午刻正中に頭北面西右脇小川のひ懸るが如くやして念仏

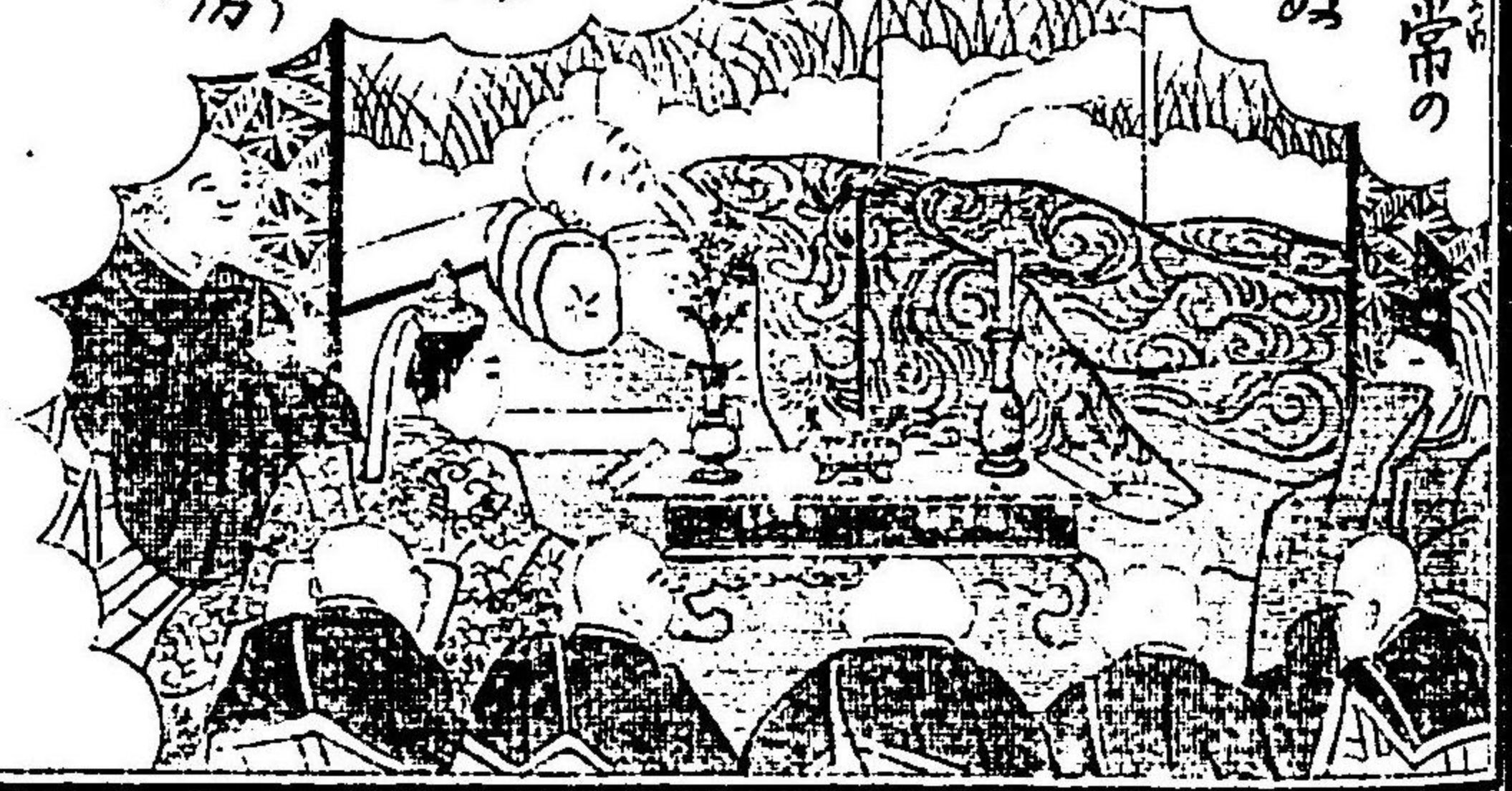


の息をへまりぬ干時春秋八十五歳御身鉢柔軟めて御相好常の
如くに有まれぬ誠す日月西の雲を隠さむひ法灯の光を滴ぬ
圓那の道俗悲傷し遠近の門徒跽泣せりて究も抱
二月の考妣を喪めに過り御終焉に遇せり人々あり

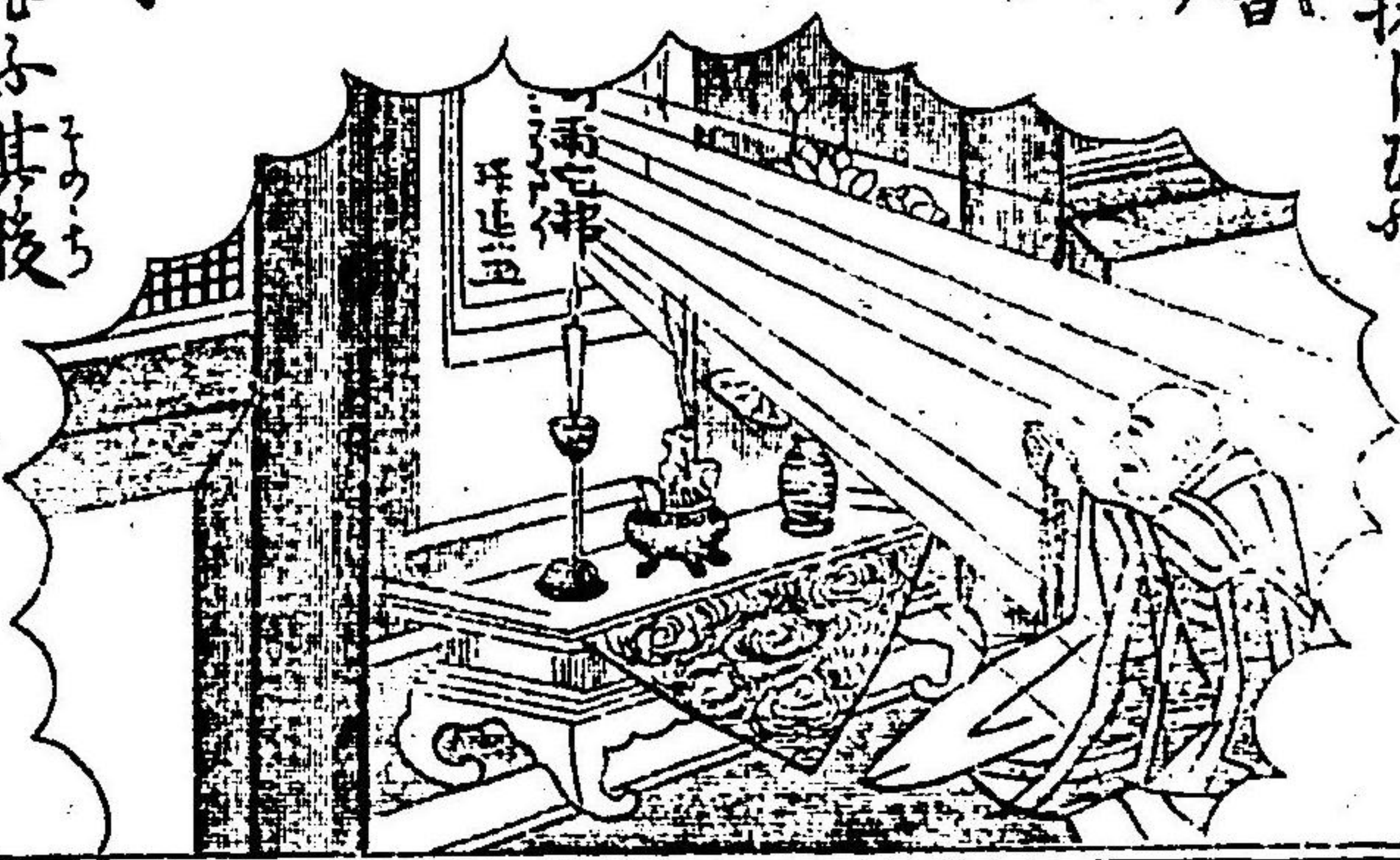
- 大納言法下實如上人 推大僧都北林房 同蓮誓言
- 三位法印蓮淳 推大僧都兼縁 推律師實賢
- 法印実悟 兼往 法印實考 同實従
- 中山中納言宣親卿 姉小路黄門基綱卿 下向安藝法眼
- 同五郎左工門 慶聞房 龍女房 小松了珍
- 順誓房 法敬房 丹後法眼 同上野助 道德房
- 越前慶祐房 河内淨光房 淨賢房 芳あり

廿九 六字名跡奇瑞並 祖師の尊像現るる事

伏以蓮如上人我朝小出世して一流の法水を再興し遠土遠境の群類を化益



滅後不控して利益を遐代に遺るんとて明應第八弥生の空に弊れひ其下靈思を
 見せぬひりて滅後に至りて其遺徳多きは中に上人翰墨を授けり
 六字の尊號の中六字特不思議あり今畧してこまきを書
 さるや或は御門葉の中に道場を焼失しける時名号煖集
 して多く仙像と成るるなり或は名号煖烟せしが其字形
 なるに明に残る或は名号破燃せしが漸くは愈返るも
 有り御入滅已後十箇年過て門葉の中かの尊輪を
 安置ししは常に常の燈明をもちけりよ名号の
 有り輝きも亦有りありてこまきをぬすり
 光明のまじりて阿弥陀仏の四字の一人にむかひ
 方便法身の尊形出来も有り如是拜す間南无の二字
 の通りに本師親鸞聖人の尊形舞散として現ゆも其後
 又蓮如上人の容貌出来しは居緒を經星霜を重ねていよく其形彰めて



佛像のまじりて出来る有り上古よも季の世よも如是の奇瑞なり有りは實は是滅後の
 利益を末代に知りぬとの法方便あり凡上人在滅の妙事これ多しとていども筆
 ちよ追記の畧して僅かに著し畢ぬ

蓮如上人御一代記圖繪終

蓮如上人

蓮如上人

蓮如上人

蓮如上人

蓮如上人

蓮如上人

全

全

20
1
60

明治二十一年三月廿四日印刷
同 年三月廿五日 繹刻出版

原版人

京都府平民

澤田友五郎

下京區第十九組塩竈町

繹刻出版者
兼發行者

同

西邨九郎右衛門

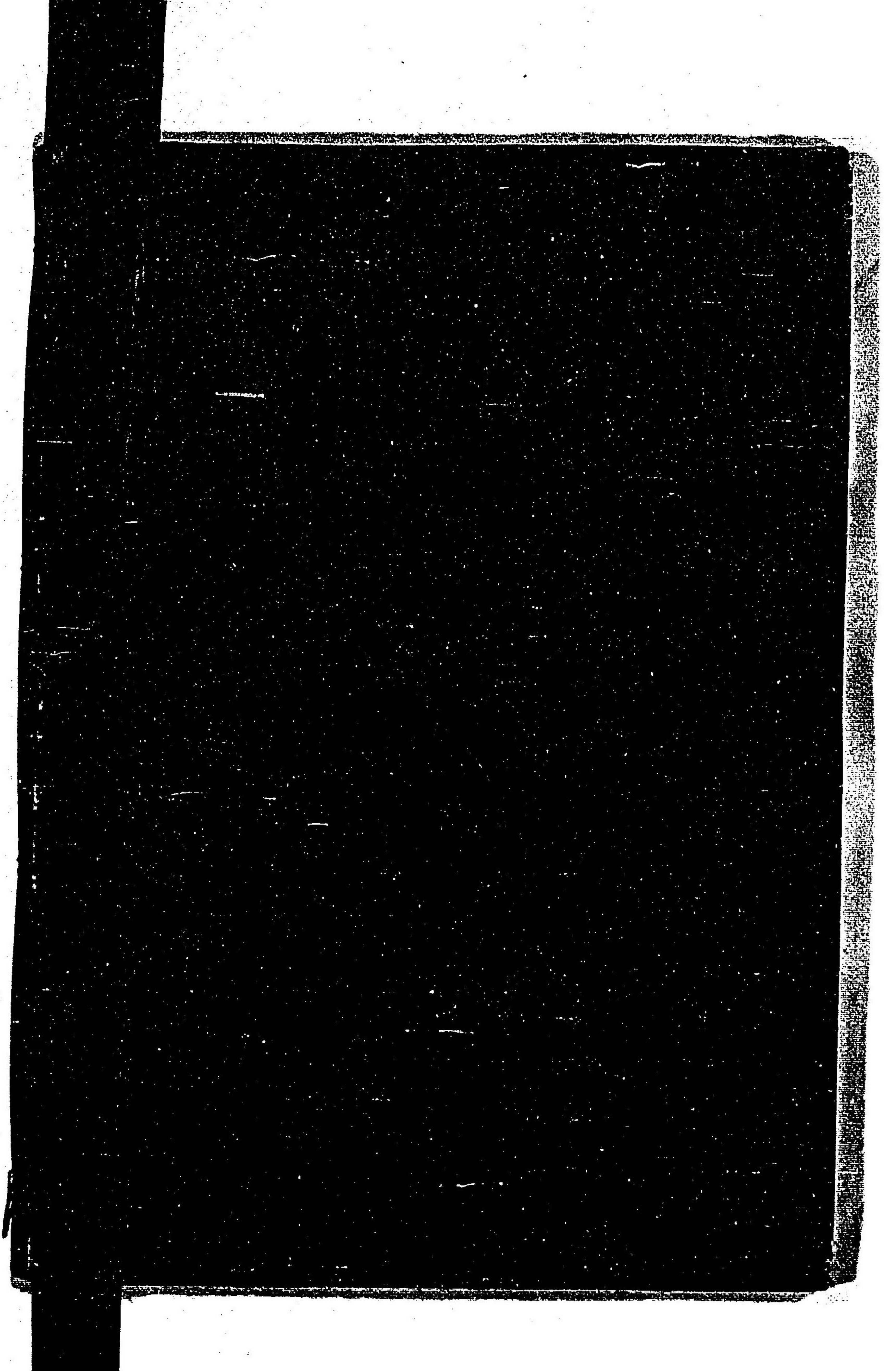
下京區第三十組橋町八番戶

印刷者

同

今井佐七

下京區第八組五軒町廿四番戶





特36
905

019279-000-4

特36-905

蓮如上人御一代記図繪

不二 良洞 / 編

M21.3

ABF-2916

